

730

730-194



1200501589227

[Faint vertical text on a small white label on the spine]

35.12.24



730
194

新 潮 文 庫

第 三 百 一 編

耽 溺

岩 野 泡 鳴 著

新 潮 社 出 版

765



野岩 泡鳴

著 鳴 泡 野 岩

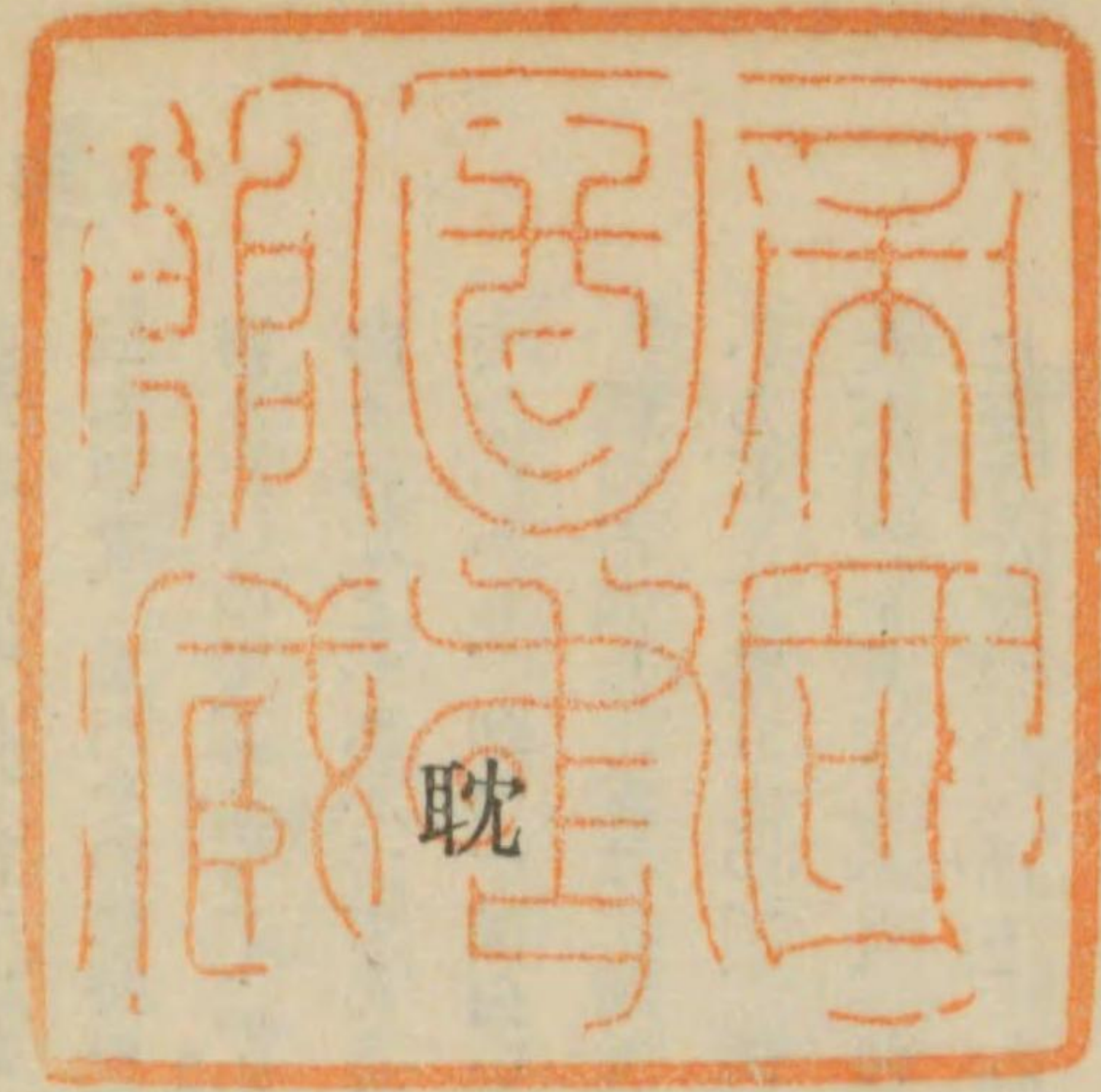


庫 文 潮 新

— 301 —

版 出 社 潮 新





730
194

溺



篠原先生 耽

.....
二五

溺
.....



僕は一夏を國府津の海岸に送ることになった。友人の紹介で、或寺の一室を借りつもりであつたのだが、たづねて行つて見ると、いろ／＼取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出来ないと云ふので、またその住持の紹介を得て、素人の家に置いて貰ふことになった。少し込み入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣りが料理屋で藝者も一人かゝへてあるので、時々客などがあがつてゐる時は、随分さう／＼しかつた。然し僕は三味線の浮き／＼した音色を嫌ひでないから、却つて面白いところだと氣に入つた。

僕の占領した室は二階で、二階はこの一室よりほかになかつた。隣りの料理屋の地面から、丈の高いいちじくが繁り立つて、僕の二階の家根を上までも越してゐる。いちじくの青い廣葉はもろさうな物だが、之を見てゐると、何となくしんみりと、氣持のいい物だから、僕は芭蕉葉や青桐の葉と同様に好きなやつだ。而もそれが僕の仕事をする座敷から直ぐそばに見える。

2
それに、その葉かげから、隣りの料理屋の綺麗な庭が見える。燈籠やら、いくつにも分岐した敷石の道やら、瓢箪なりの池やら、低い松や柳の枝ぶりを造つて刈り込んであるのやら、例の箱庭式はこせつて厭な物だが、掃除のよく行き届いてゐるのは、これも氣持のいい事の一つだ。その庭の片端

3
の僕の方に寄つてるところは、勝手口のあるので、他の方から低い竹垣を以つて仕切られてゐて、そこにある井戸——それも僕の座敷から見える——は、僕の家の人々もつかはせて貰ふことになつてゐる。

隣りの家族と云つては、主人夫婦に子供が二人、それに主人の姉と藝者とが加はつてゐた。主人夫婦は極お人よしで家業大事とばかり、家の掃除と料理との爲めに、朝から晩まで一生懸命に働いてゐた。主人の姉——名はお貞——と云ふのが、昔からのえら物で、その女將たる實權を握つてゐて、地方有志の宴會にでも出ると、井筒屋の女將お貞婆さんと云へば、なか／＼幅が利く代り、家にゐては、主人夫婦を呼び棄てにして、少しでもその意地の悪い心に落ちないことがあると、意張りたがるお客が家の者にがなりつく様な權幕であつた。

お君といふその姪、乃ち、その娘も、年は十六だが、叔母に似た性質で——客の前へ出ては内氣で、無愛嬌だが、——とんまな兩親のしてゐることがもどかしくツて、もどかしくツてたまらないと云ふ風に、自分が用のない時は、火鉢の前に坐つて、目を離さず、その長い願で兩親を使ひまはしてゐる。前年など、かゝへられてゐた藝者が、この娘の皮肉の折檻に堪へ切れないで、海へ身を投げて死んだ。それから、急に不評判になつて、あの婆さんと娘とがある間は、井筒屋へは行つてやらないと云ふ人々が多くなつたのださうだ。道理で餘り景氣のいい料理店ではなかつた。

僕が英語が出来るといふので、僕の家の人を介して、井筒屋の主人がその子供に英語を教へてくれろと頼んで来た。それも眞面目な依頼ではなく、時々西洋人が来て、應對に困ることがあるので、「おあがんなさい」とか、「何を出しましょう」とか、「お酒をお飲みですか、ビールをお飲みですか」とか、「藝者を呼びましょうか」とか、「大相上機嫌です、ね」とか、「またいらつしやい」とか、さういふことを専門に教へてくれると云ふのであつた。僕は好ましくなかつたが、仕事のあひまに教へてやるのも面白いと思つて、會話の目録を作らして、そのうちを少しづつと、二人がほかで習つて来るナショナル讀本の一と二を讀まして見ることにした。お君さんとその弟の正ちゃんとが毎日午後時間を定めて習ひに來た。正ちゃんは十二歳で、病身だけに、少し薄のろの方であつた。

或日、正ちゃんは、學校のないので、午前十一時頃にやつて來た。僕は大切な時間を取られるのが惜しかつたので、いゝ加減に教へてすましてしまふと、

「うちの藝者も先生に教へていたゞきたいと云ひます」と云ひ出した。

「面倒くさいから、厭だよ」と僕は答へたが、跡から思ふと、その時から既にその藝者は僕をだまさうとしてゐたのだ。正ちゃんは無邪氣なもので、

「どうせ習つても、馬鹿だから、分るもんか？」

「なぜ？」

「こないだも大ざらひがあつて、義太夫を語つたら、熊谷の次郎直實といふのを熊谷の太郎と云うて笑はれたんだ——あ、あれがうちの藝者です、寢坊の親玉。」

と、そとを指さしたので、僕もその方に向いた。いちじくの葉かげから見えたのは、しごき一つのだらしない寢巻き姿が、楊枝を銜はへて、井戸端からこちらを見て笑つてゐる。

「正ちゃん、いゝ物をあげようか？」

「あゝ」と立ちあがつて、両手を出した。

「ほうるよ」と、しなやかにだが、勢ひよくからだ曲がるかと思ふと、黒い物が飛んで來て、正ちゃんの手をはづれて、僕の肩に當つた。

「おほ、ほ、ほ！ 御免下さい」と、向ふは笑ひくづれたが、直ぐ白いつばを吐いて、顔を洗ひ出した。飛んで來たのは僕のがま口だ。

「これはわたしのだ。さつき井戸端へ水を飲みに行つた時、落したんだらう。」

「あの狐に取られんで、まア、よかつた。」

「可哀さうに、そんなことを云つて、——何といふ名か、ね？」

「吉彌と云ひます。」

「歸つたら、禮を云つてお呉れ」と、僕は僕の讀みかけてゐるメレヅコウスキの小説を開らいた。

正ちやんは、裏から来たので、裏から歸つて行つたが、それと一緒に何か話しをしながら、家に這入つて行く吉彌の素顔を鳥渡のぞいて見て、餘り色が黒いので、僕はいや氣がした。

二

僕はその夕がた、あたまたの勞れを癒しに、井筒屋へ行つた。それも、角の立たない様にわざと裏から行つた。

「あら、先生！」と、第一にお貞婆さんが見つけて、立つて来た。「こんなむさ苦しいところからお出んでも——」

「なアに、僕は遠慮がないから——」

「まアお這入りなさつて下さい。」

「失敬します」と、僕は臺どころの板敷きからあがつて、大きな圍爐裡のそばへ坐つた。

主人は尻はしよりで庭を掃除してゐるのが見えた。おかみさんは下女同様な風をして、広い臺どころで働いてゐた。僕の坐つたうしろの方に、広い間が一つあつて、そこに大きな姿見が据ゑてある。お君さんがその前に立つて、頻りに姿を氣にしてゐた。壘一枚ほどに切れてゐる細長い圍爐裡には、この暑いのに、燃木が四五本もくべてあつて、天井から雁木で釣るした鐵瓶がぐらく煮え立つてゐ

た。「どうも、毎度、子供がお世話になつて」と、爐を隔て、僕と相對したお貞婆さんが改まつて挨拶をした。

「どうせ、丁寧に教へてあげる暇はないのだから、お禮を云はれるまでのことではないのです。」

「この暑いのに、よう精が出ます、な、朝から晩まで勉強をなさつて？」

「さうやつてゐなければ喰へないんですから。」

「御常談を——それでも、先生は外の人と違つて、遊びながらお仕事が出来るので、結構で御座ります。」

「貧乏ひまなしの譬へになりませう。」

「どう致しまして、先生——おい、お君、先生にお茶をあげないか？」

そのうち、正ちやんがどこからか歸つて来て、僕のそばへ坐つて、今聽いて来た世間のうはさ話しを出す。お君さんは茶を出して来る。お貞が二人の子供を實子の様に可愛がり、また自慢するのが近處の人々から嫌はれる一原因だと聽いてゐたから、僕はそのつもりであしらつてゐた。

「どうも馬鹿な子供で困ります」と言ふのを、

「なアに、ふたりとも利口なたちだから、おぼえがよくつて未頼母しい」と、僕は讚めてやつた。

「おッ母さん、實は氣が鬱して來たんで、一杯飲ましてもらひたいんです、どツかい、座敷を一つ開けてもらひませうか？」

「それは有難たう御座ります」とお貞はお君に目くばせしながら、

「風通しのえゝ二階の三番がよかる。あすこへ御案内おし。」

「なアに、どこでもいゝですよ」と、僕は立つてお君さんについて行つた。煙草盆が來た、改めてお茶が出た。

「何をおあがりなさいます」と、お君のおきまり文句らしいのを聴くと、僕が西洋人なら僕の教へた片言を試みるのだらうと思はれて、何だか厭な、小癪な娘だといふ考へが浮んだ。僕はいゝ加減に見つくりつて出す様に命じ、巻煙草をくはへて寝ころんだ。

先づ海苔が出て、お君が鳥渡酌をして立つた跡で、ちびり／＼飲んでゐると二三品は揃つて、そこへお貞が相手に出て來た。

「お獨りではお寂しかろ、婆々アでもお相手致しませう。」

「結構です。まア一杯」と、僕は盃をさした。

婆さんはいろんな話をした。この家の二三年前までは繁盛したことや、近頃は一向客足が遠いことや、土地の人々の薄情なことや、世間で自家の缺點を指摘してゐるのは知らないで、勝手のいゝ泣き

言ばかりが出た。やがてはしご段をあがつて、廊下に違つた足音がすると思ふと、吉彌が銚子を持つて來たのだ。けさ見た素顔やなり振りとは違つて、尋常な藝者に出來あがつてゐる。

「けさほどは失禮致しました」と、しとやかながら冷かす様に手をついた。

「僕こそお禮を云ひに來たのかも知れません。」

「かも知れませんが、お禮になりますまい！」

「いや、どうも——それでは、ありがたう御座ります」と、僕はわざとらしくあたまを下げた。

「まア、それで、あたい氣がすんだ、わ。」

吉彌はお貞を見て、勝利がほに扇子を使った。

「全體、まア」と、はじめから怪幻な様子をしてゐたお貞が、「どうしたことよ、出し抜けになぞ見た様で？」

「なアに、おッ母さん、けさ、僕が落したがま口を拾つてもらつたんです」といふと、その跡は吉彌の笑ひ聲で説明された。

「それでは、いッそだまつてをれば儲かつたのに。」

「ほんとに、あたい、さうしたらよかつた。」

「生憎銅貨が二三錢と來たら、如何に吉彌さんでも驚くだらう。」

「この子はなか／＼慾張りですよ。」

「あら、叔母さん、そんなことはない、わ。」

「まあ、一つさしませう」と、僕は吉彌に猪口を渡して、「今お座敷は明いてゐるだらうか？」

「叔母さん、どう？」

「今のところでは、口がかゝつてをらない。」

「ぢやア、僕がけさのお禮として玉をつけませう。」

「それは濟みませんけれど」と云ひながら、婆アさんが承知のしるしに僕の猪口に酒を酌いで、下りて行つた。

三

「お前の生れはどこ？」

「東京。」

「東京はどこ？」

「浅草。」

「浅草はどこ？」

「あなたはしつツこいのね、千束町よ。」

「あ、あの溝溜の様な池があるところだらう？」

「おあいにくさま、あんな池は迅くにうまつてしまひましたよ。」

「ぢやア、うまつた跡にぐらつく安借家が出来た、その二軒目だらう？」

「しどいわ、あなたは」と、ぶつ眞似をして、「はい、これでもうちへ歸つたら、お嬢さんで通せますよ。」

「お嬢さん藝者萬歳」と、僕は猪口をあげる眞似をした。

三味を弾かせると、ぺこん／＼とごまかし弾きをするばかり。面白くもないが、僕は酔つたまぎれに歌ひもした。

「もう、よせ／＼。」僕は三味線を取りあげて、脇に投げやり、「おれが手のすぢを見てやらう」と、右の手を出させたが、指が太く短くツて實に無格好であつた。

「お前は全體いくつだ？」

「二十五。」

「うそだ、少くとも二十七だらう？」

「ぢやア、さうして置いて？」

「お父さんはあるの？」

「あります。」

「何をしてゐる？」

「下駄屋。」

「おツ母さんは？」

「藝者の桂庵。」

「兄さんは？」

「勸工場の店番。」

「姉さんは？」

「ないの。」

「妹は？」

「藝者を引かされる筈。」

「どこにつとめてゐるの？」

「大宮。」

「引かされてどうするの？」

「その人の奥さん。」

「なアに、妾だらう。」

「妾なんか、つまりませんわ。」

「ぢやア、おれの奥さんにしてやらうか？」と、からだを引ッ張ると、「はい、よろしく」と、笑ひながら寄つて来た。

四

翌朝、食事をすましてから、僕は机に向つてゆうべのことを考へた。吉彌が電燈の球に『やまと』のあき袋をかぶせ、はしご段の方に耳をそば立てた時の様子を見て、もろい奴、見ず轉の骨頂だといふ嫌氣がしたが、然し自分の自由になる物は、——犬猫を飼つてもさうだらうが——それが人間であれば、如何なお多福でも、一層可愛くなるのが人情だ。國府津にゐる間は可愛がつてやらう。東京につれて歸れば面白からうなど、それからそれへ空想をめぐらしてゐた。

下座敷でなまめかしい聲がして、段々二階へあがつて来た。吉彌だ。書物を開らかうとしたところだが、まんざら厭な氣もしなかつた。

「田村先生、お早う。」

「お前かい？」

「來たら、いけないの？」びったり、僕のそばにからだを押しつけて坐つた。それツきりで、目が物を云つてゐた。僕はその頸をいだいて口づけをしてやらうとしたら、わざとかほをそむけて、

「厭な人、ね。」

「厭なら來ないがいゝ、さ。」

「それでも、來たの——あたし、あなたの様な人が好きよ。商賣人？」

「あゝ、商賣人。」

「どんな商賣？」

「本書き商賣。」

「そんな商賣がありますもんか？」

「まア、ない、ね。」

「人を馬鹿にしてゐるの、ね」と、僕の肩をたゝいた。

僕を商賣人と見たので、また厭氣がしたが、他日わが國を風靡する大文學者だなどゝ威ぼつたところで、かの女の分らう筈もないから、茶化すつもりでわざと顔をしかめ、

「あ、いたゝ！」

「うそく、そんなことで痛いものですか？」と、ふき出した。卦算の龜の子をおもちやにしてゐた。

「全體どうしてお前はこんなところにぐづついてるんだ？」

「東京へ歸りたいの。」

「歸りたきやア早く歸つたらいいぢやアないか？」

「おツ母さんにさう云つてやつた、わ、迎へに來なきやア死んぢまうツて。」

「おそろしいこつた。然しそんなことで、びくつくおツ母さんぢやアあるまい。」

「おツ母さんはそりやアく可愛がるのよ。」

「獨りでうぬぼれてやアがる。誰がお前の様な者を可愛がるもんか？一體お前は何か出来るのだ？」

「何でも出来る、わ。」

「第一、三味線は下手だし、歌もまづいし、こゝから聽いてゐても、たゞきやアく騒いでるばかりだ。」

「ほんとうは、三味線はきらひ、踊りが好きだつたの。」

「ぢやア、踊つて見るがいゝ」とは云つたものゝ、ふと顔を見合はせたら、抱き附いてやりたい様な氣がしたのを、しつツこいと思はせない爲め、まぎらしに仰向けに倒れ、兩手をうしろに組んだまゝ、その上にあたまをのせ、吉彌が机の上でいたづらをしてゐる横がほを見ると、色は黒いが、鼻柱が高

く、目も口も大きい。それに丈が高いので、役者にしたら、舞臺づらがよく利くだらうと思ひ附いた。鳥渡斷つて置くが、僕は或脚本——それによつて僕の進退を決する——を書く爲め、材料の整理をしに来てゐるので、少くとも女優の獨りぐらゐは、之を演ずる段になれば必要だと思つてゐた時だ。

「お前が踊りを好きなら、役者になつたらどうだ？」

「あたい、賛成だ、わ。甲州にゐた時、朋輩と一緒に五郎、十郎をやつたの。」

「さぞこの尻が大きかつたらう、ね。」うしろからぶつと、

「よして頂戴よ、お茶を引く、わ」と、僕の手を拂つた。

「お前が役者になる氣なら、僕が十分周旋してやらア。」

「どこへ、本郷座？ 東京座？ 新富座？」

「どこでもいゝや、ね、それは僕の胸にあるんだ。」

「あたい、役者になれば、妹もなりたがるにきまつてる。それに、あたいの子——」

「え、お前の子供があるんか？」

「もとの旦那に出來た娘なの。」

「いくつ？」

「十二。」

「意氣地なしのお前が子までおツつけられたんだらう？」

「さうぢやアない、わ。青森の人で、手が切れてからも、一年に一度ぐらゐは出て来て、子供の食ひ扶持ぐらゐはよこす、わ。——それが面白い子よ。五つ六つの時から踊りが上手なんで、料理屋や待合から借りに來るの。『はい、今晚は』ツて、澄ましてお客さんの座敷へ這入つて来て、踊りがすむと、『姉さん、御祝儀は』ツて催促するの。小癩な子よ。芝居は好きだから、あたいよく仕込んでやる、わ。」

吉彌は直ぐ乗り氣になつて、いよくさうと定まれば、知り合ひの待合や藝者屋に披露して引き幕を贈つて貰はなければならないとか、披露にまはる衣服にこれ／＼かゝるとか、かの女も寝ころびながら、いろ／＼の注文をならべてゐたが、僕は、その時になれば、どうとも工面してやるがと返事をして、先づ二三日考へさせることにした。

五

それからといふもの、僕は毎晩の様に井筒屋へ飲みに行つた。吉彌の顔が見たいのと、例の決心を確めたのであつたが、當人の決心が先づ本統らしく見えると、直ぐまた僕はその親の意見を聴きにやらせた。親からは近々當地へ來るから、その時よく相談するといふ返事が來たと、吉彌が話した。

僕一個では、また、或友人の劇場に關係があるのに手紙を出し、かうくゝいふ女があつてかうくゝだと、その缺點と長所とを誇張しないつもりで一考を求め、遊びがてら見に来てくれると云つて置いたら、ついでがあつたからと云つて出て来てくれた。吉彌を一夕友人に紹介したが、もう、その時は僕が深入りし過ぎてゐて、女優問題を相談するよりも、二人ののろけを見せた様に友人に見えたのだから。僕よりもずつと年若い友人は、来る時にも「田村先生はひますか」といふ様な調子でやつて来て、歸つた時にはその晩の勘定五圓なにがしを拂つてあつたので、氣の毒に思つて、僕は直ぐその宿を訪ふと、まだ歸らないと云ふことであつた。どこかでまた焼酎を飲んでゐるのだらうと思つたから、その翌朝を待つて再び訪問すると、もう出發してゐなかつた。僕は何だか興ざめた氣がした。それから、一週間、二週間を経ても、友人からは何の音沙汰もなかつた。然し、僕は、どんな難局に立つても、この女を女優に仕立てあげようといふ熱心が出てゐた。

六

僕は井筒屋の風呂を貰つてゐたが、雨が降つたり、餘り涼しかったりする日は沸かないので、自然近處の銭湯に行くことになつた。吉彌も自分のうちのは立つても夕がたなどで、お座敷時刻の間に合はないと云つて、銭湯に行つてゐた。僕が行く頃には吉彌も来た、吉彌の来る頃には僕も行つた。別に申し合はせたわけでもなかつたが、時々は向ふから誘ふこともあつた。氣が附かずにゐたが、毎度風呂の中で出くはす男で、石鹸を女湯の方から貰つて使ふのがあつて、僕はいつも厭な、にやけた奴だと思つてゐた。それが一度向ふから餘り女らしくもない手が出て、

「旦那、しゃぼん」といふ聲が聴えると、てつきり吉彌の聲であつた。男はいつも女湯の方によつて洗つてゐた。

このふたりは湯をあがつてからも、必らず立ち話した。男は腰巻き一つで、うちはを使ひながら、湯の番人の坐つてゐる番臺のふちに片手をかけて女に向ふと、女はまた、どこで得たのか、白い寒冷紗の襷つき西洋寝巻をつけて、そのそばに立ちながら涼んでゐた。湯あがりの化粧をした顔には、ほんのりと赤みを帯びて、見ちがへるほど美しかつた。

外にも藝者の這入りに來てゐるのは多いが、いつも目に立つのはこの女がこの男と相對してふざけたり、笑つたりしてゐたことである。はじめはこの男をひいきのお客位にしか僕は思つてゐなかつたが、石鹸事件を知つたので、これは僕の戀がたきだと思つた。否、戀がたきとして競争する必要もないが、吉彌が女優になりたいなどは眞ツかなうそだと合點した。急に胸がむか／＼として來ずにはゐられなかつた。その様子がかの女には見えたかも知れないが、僕は之を顔にも見せないつもりで、いそいで衣服をつけてそこを出た。しまつたと後悔したのは、出口の障子をつい烈しくしめたことだ。

けふは早く行つて、あの男またはその他の人に呼ばれないうちに、吉彌めをあげ、一つ精一杯なじつてやらうと決心して、井筒屋へ行つた。湯から歸つて直ぐのことであつた。

「叔母さん。」僕もこゝの家族の云ひならしに従つて、お貞婆アさんをさう呼ぶことにしたのだ——

「けふは今から吉彌さんと呼んで、十分飲みますぞ。」

「毎度御ひいきは有難う御座いますけれど、先生はさうお遊びなさつてもよろしう御座いますか？」

「なアに、かまひませんとも。」

「然し、まだ奥さんにはお目にかゝりませんけれど、おうちでは獨りで御心配なさつてをられますよ。それがお可哀さうで。」

「かゝアは何も知つてませんや。」

「いゝえ、先生の様なお氣質では、つれ添ふ身になつたら大抵想像がつきますもの。」

「よしんば、知れたツてかまひません。」

「先生はそれでもよろしからうが、私どもがそばにゐて、奥さんにすみません。」

「心配にやア及びません、さ。」景氣けいきよくは應對してゐたものゝ、考へて見ると、吉彌に熱くなつてゐるのを勘かたづいてゐるので、旦那があるからとても駄目だといふ心をほめかすのではないかとも取れないことではない。また、一方には、飲むばかりで借りが出来るのを、若し拂はれない様なことか

あつてはと心配し出したのではないかとも取れた。僕はわざと作り笑ひを以つて平氣をよそひ、お貞やお君さんや正ちゃんやと時間つぶしの話をした。吉彌がまだ湯から歸らないのをひそかに知つてゐたからだ。

「吉彌は風呂に行つてまだ歸りませんが——もう、歸りさうなものだに、なア——とお貞はお君に云つた。

「もう、一時間半、二時間にもなる」と、正ちゃんが時計を見て口を出した。

「また、あの青木と蕎麥屋へ行つたのだらう。」お君が長い頸を動かした。蕎麥屋と聽けば、僕も吉彌に引ッ込まれたことがあつて、よく知つてゐるから、そこへ行つてゐる事情は十分察しられるので、いゝことを聽かしてくれたと思つた。然し、この利口りかうではあるが小續な娘を、教へてやつてゐるが、僕は内心非常に嫌ひであつた。年にも似合はず、人の缺點を横からにらんでゐて、自分の氣に食はないことがあると、何も云はないで、親にでも強く當る。

「氣が強つようて困ります」とは、その母が僕に會つて云つたことだ。まして雇ひ人などに對しては、最も皮肉な當り方をするので、吉彌はいつもこの娘を見るとぶり／＼してゐた。その不平を吉彌は度々僕に漏らすことがあつた。もつとも、お君さんをさういふ氣質に育てあげたのは、もとはと云へば、親達が悪いのらしい。世間の評判を聽くと、まだ肩あげも取れないうちに、箱根の或旅宿の助平すけへいおや

ぢから大金を取つて、水あげをさせたといふことだ。小積な娘だけに段々焼けッ腹になつて来るのは當り前だらう。

「あの青木の野郎、今度來たら十分云つてやらにやア」と、お貞が受けて、「借金が返せないもんだから、うちへ來ないで、こそ／＼とほかでぬすみ喰ひをしやアがる！」

子供はふたりとも吹き出した。

「吉彌も吉彌だ、あんな奴にくツついてをらなくとも、お客さんはどこにでもある。——あんな奴があつて、うちの商賣の邪魔をするのだ。」

さう思ふのも實際だ。僕が來てからの様子を見てゐても、料理の仕出しと云つてもさうある様には見えないし、あがるお客はなほ更ら少ない。たよりとしてゐたのは、吉彌獨りのかせぎ高だ。毎日夕がたになると、家族は圍爐裡を取りまいて、吉彌の口のかゝつて來るのを今か今かと待つてゐる。

やがて吉彌はのツそり歸つて來た。

「何をぐづ／＼してをつたんだ？ 直ぐお座敷だよ。」お貞はその割り合ひに強くは當らなかつた。

「さう。」吉彌は平氣で返事をして、爐のそばに坐つて、「いらつしやい。」僕に挨拶をしたが、まるめて持つてゐた手拭としやぼんとをどこに置かうかとまごついてゐたが、それを爐のふちへ置いて、「一本、どうか」と、僕のそばの巻煙草入れに手を出した。

その時、吉彌は僕のうしろに坐つてゐるお君の鋭い目に出くはしたらしい。急に險相な顔になつて、「何だい、そのならみさまは？ 蛙ぢやアあるめいし。手拭をこゝへ置くのがいけなけりやア、勝手に自分でどこへでもかけるがいゝ！ いけ好かない小まツちやくれだ！」

「一體どうしたんだ」と、僕が鳥渡吉彌に當つて、お君をふり返ると、お君は黙つて下を向いた。

「あたいがゐるのがいけなけりやア、いつからでも出すがいゝ。へん、去年身投げをした藝者の様な意氣地なしではない。死んだツて、化けて出てやらア。高がお客商賣の料理屋だ、今に見るがいゝ」と、吉彌は頻りに力んでゐた。

僕は何にも知らない風で、かの女の口をつぐませると、それまでわく／＼してゐたお貞が口を出して、「まア、えい。まア、えい。——子供同士の喧嘩です、先生、どうぞ悪からず。——さア、吉彌、支度々々。」

「厭だが、行つてやらうか」と、吉彌はしぶ／＼立つて、大きな姿見のある化粧部屋へ行つた。

七

「お座敷は先生だツたの、ねえ、——あんなことを云つて、どうも失禮」と、吉彌は三味線を以つて這入つて來た。

「……………」僕はさっきから獨りで、どういふ風に油をしぼつてやらうかと、頻りに考へてゐたのだが、やさしい聲をして、やさしい様子で來られては、今まで胸にこみ合つてゐたさまじくの忿怒のかたちは、太陽の光に當つた霧と消えてしまつた。

「お酌」と出した徳利から、心では受けまいと定めてゐた酒を受けた。然し、まだ何となく胸のもつれが取れないので、碌に話をしなかつた。

「おこつてるの？」

「……………」

「え、おこつてゐるの？」

「……………」

「あたい知らない、わ！」

吉彌は赫と顔を赤くして、立ちあがつた。そのまゝ下へ行つて、僕のおこつてゐることを云ひ、湯屋で見たことを妬いてゐるのだと云ふことが若しも下のものらに分つたら、僕一生の男を下げるのだと心配したから、

「おい、おい！」と命令する様な強い聲を出した。それでも、かの女は行つてしまつたが、まさかそのまゝ來ないことはあるまいと思つたから、獨りで酌をしながら待つてゐた。果して銚子を持つて直

ぐ再びやつて來た。向ふがつんとしてゐるので、今度は僕から物を云ひたくなつた。

「どうだい、僕もまた一つ蕎麥をふるまつて貰はうぢやアないか？」

「あら、もう、知つてるの？」

「へん、そんなことを知らない様な馬鹿ぢやアねい。役者になりたいからよろしく頼むなどと白ばツくれて、一方ぢやア、どん百姓か、肥取りかも知れねいへッぽこ且つくと乳くり合つてゐやアがる。」

「そりやア、あんまり可哀さうだ、わ。あの人がるなけりやア、東京へ歸れないぢやアないか、ね。」

「どうして、さ？」

「ぢやア、誰れが受け出してくれるの？ あなた？」

「おれのはお前が女優になつてからの問題だ。受け出すのは、心配なくおツ母さんが來て始末をつけると云つたぢやアないか？」

「だから、おツ母さんが來ると云つてるのでせう——」

それで分つたが、おツ母さんの來るといふのは、女優問題でわざ／＼來るのではなく、青木といふ男に受け出されるそのかけ合ひの爲めであつたのだ。

「あんな者に受け出されて、ヤッぱし、こんなしみツたれた田舎にくすぶつてしまふのだらうよ。」

「おほきにお世話だ、あなたよりもさきに東京へ歸りますよ。」

「歸つて、どうするんだ？」

「お嫁に行きますとも。」

「誰れが貴さまの様な者を貰つてくれよう？」

「憚りながら、これでも衣物をこさへて待つてゐてくれるものがありますよ。」

「それぢやア、青木が可哀さうだ。」

「可哀さうも何もあつたもんか？ あいつもこれまでに大分金をつぎ込んだ男だから、なかなか思ひ切れる筈はない、さ。」

「どんなに馬鹿だツて、そんなのろまな男はなからうよ。」

「どうせ、おかみさんがやかましくツて、あたいをこゝには置いとけないのだから、たまに向ふから東京へ出て来るだけのことだらう、さ。」

男はそんなものと高をくゞられてゐるのかと思へば、僕はまた厭氣がさして來た。

「お嫁に行つて、妾になつて、まだその上に女優を慾張らうとは、お前も随分ふてい奴、さ。」

「さうとも、さ、こんなにあつたからだもの、かせげるだけかせぐん、さ、ね。」

「ぢやア、もう、僕は手を引かう」と、僕は坐り直した。「青木が呼びに來るだらうから下へ行け。」

「あの人は今晚來ないことになつたの——そんなに云はないで、さ、あなた」と、吉彌はあまえる様にもたれかゝつて、「今云つたことはうそ、みんなうそ。決心してゐるんだから、役者にして頂戴よ。」

おツ母さんだツて、あたいから云へば、承知するに定つてる、わ。」

僕は、女優問題さへ忘れゝば、恨みもつらみもなかつたのだから、かうやつて飲んでゐるのは悪くもなかつた。

吉彌はまた早くこの厭な井筒屋を抜けて、自由の身になりたいのであつた。何んでも早く青木から身受けの金を出させようと運動してゐるらしく、先刻も亦青木の云ひなり放題になつて、その代りに何かの手筈を定めて來たものと見えた。おツ母さんから一筆青木に當てた依頼状さへあれば、あすにも樂な身になれるといふので、僕は思ひも寄らない僞筆を頼まれた。

八

青木といふのは、來遊の外國人を當て込んで、箱根や熱海に古道具屋の店を開き、手廣く商賣が出來てゐたものだが、全體無筆な男だから、人の借金證書にめぐら判を押しした爲め、殆ど破産の状態に落ち入つたが、この頃では多少回復がついて來たらしかつた。今の細君といふのは、ヤツぱり、井筒屋の藝者であつたのを引かしたのだ。二十歳の娘をかしらに既に三人の子持ちだ。はじめて家を持つ

た時、などは、井筒屋のお貞（その時は、まだお貞の亭主が生きてゐて、それが井筒屋の主人であつた）の思ひやりで、臺どころ道具などを初め、所帯を持つに必要な物は殆どすべて揃へて貰ひ、飯の炊き方まで手を取らないまでにして世話して貰つたのであるが、月日の経つに従ひ、この新夫婦はその恩義を忘れたかの様に疎くなつた。お貞は、今に至るまでも、このことを云ひ出しては、輕蔑と悪口との種にしてゐるが、この一二年來不景氣の店へ近頃最もしげ／＼来るお客は青木であつたから、陰では悪く云ふものゝ、面と向つては、進まないながらも、十分のお世辭をふり撒いてゐた。

青木は井筒屋の米櫃でもあつたし、また吉彌の旦那を以つて得々としてゐたのである。然しその實、苦しい工面をしてゐたといふことは、僕が當地へ初めて著した時尋ねて行つた寺の住職から聽くことが出來た。

住職のことはこの話にさう編み込む必要がないが、兎に角、渠は僕の室へよく遊びに來た、僕もよく遊びに行つた。酔つて來ると、随分面白い坊主で、いろんなことをしゃべり出す。それとなく、吉彌の評判を聽くと、色が黒いので、土地の人はかの女を「おからす藝者」といふことを僕に云つて聽かせたことがある。之を聽かされた日、僕は、歸つて來てから、吉彌にもつと顔をみがく様に忠告した。かの女の黒いのは寧ろ無精だからであると僕には思はれた。

「磨いて見せるほどあたいがうち込む男は、この國府津にやアゐないよ」とは、かの女がその時の返事であつた。

住職の知り合ひで、或小銀行の役員をつとめてゐる田島といふものも、亦、吉彌に熱くなつてゐることは、住職から聽いて知つてゐたが、この方に對しては別に心配するほどのこともないと見たから、僕も眼中に置かなかつた。吉彌を通じて僕に會ひたいと云ふことづつてもあつたが、僕は面倒だと思つてはねつけて置いた。且どうも當地にとゞまる女ではないし、また歸つたら女優になると云つてゐるから、女房にしようなどいふ野心を起して、つまらない金は使はない方がよからうと、渠に忠告してやれと僕は住職に勧めたことがある。一方にはそんなしほらしいことを云つて、また一方では偽筆を書き、僕のその時の矛盾は——あとから見れば——甚しいもので、もう、殆ど全く目が暗んでゐたのだらう。

吉彌は、自分に取つては、最も多くの世話を受けてゐる青木をも、あたまから見くびつてゐたのだから、平氣で僕の筆を利用しようとした。それを以つて綺麗に井筒屋を出る手つゞきをさせようとしたのは翌朝のことであるが、さう早くは成功しなかつた。

僕が晝飯を喰つてゐる時、吉彌は僕のところへやつて來て、飯の給仕をしてくれながら太い指にきらめいてゐる寶石入りの指輪を嬉しさうにいぢくつてゐた。

「どうしたんだ？」僕はいぶかつた。

「人質ひとぢに取つてやつたの。」

「おッ母さんの手紙がばれたんだらう——？」

「いゝえ、ゆうべこれ（と、鼻をゆびさしながら）に負けたんで、現金がないと、さ。」

「馬鹿野郎！ だまされてゐやアがる。」僕は僕のことでも頼たのんで出来なかつたものを責せめるやうな氣になつてゐた。

「本統よ、そんなにうそがつける男ぢやアないの。」

「のろけてゐやがれ、おめえはよッぽどうすのろ藝者だ。——どれ、見せろ。」

「よッぽどするでせう？」抜いて出すのを受取つて見たが、鍍金めっきらしいので、

「馬鹿！」僕はまた叱りつけたやうにそれをはうり出した。

「しどい、わ。」吉彌は眞ツかになつて、恨めしさうにそれを拾つた。

「そんな物で身受けが出来る代物しろものなら、お前はそこら當りの達磨だるまも同前だア。」

「どうせ達磨でも、憚りながら、あなたのお世話にやアなりませんよ——ぢやア、これはどう？」帯の間から小判を一つ出した。「これなら、指輪に打たしても立派でせう？」

「どれ」と、ひつたくりかけたら、

「いやよ」と、引ッ込めて、「あなたに見せたッて、けちをつけられるだけ損だ。」

「ぢやア、勝手にしやアがれ。」

僕は飯をすまし、茶をつがせて、箸をしまつた。吉彌はのびをしながら、

「あゝ、あゝ、もう、死んぢまいたくなつた。いつおッ母さんがお金を持つて来てくれるのか、もう一度手紙を出さうか知ら？」

「いゝ旦那だんながついてゐるのに、持つて来る筈はない、さ。」

「でも、何とやらで、いつはづれるか知れたものぢやアない。」

「それがいけなけりやア、また例のお若い人に就つくがいゝや、ね。」

「それがいけなけりやア——あなた？」

「馬鹿ア云へ。そんな腑ふぬけな田村先生ぢやアねえ。——おれは受け合つて置くが、お前の様に氣の多い奴は、結局こゝを去ることが出来ずにすむんだ。」

「いやなこツた！」立ち上つて、両手に膳ぜんと土瓶どびんとを持ち、「あとでいらつしやい」と云つて二階の段を降りて行つた。下では、「きいちやん、御飯」と、呼びに来たお君の聲がきこえた。

九

その日の午後、井筒屋へ電報が来た。吉彌の母からの電報で、今新橋を立つたといふ知らせだ。僕

が何気なく行つて見ると、吉彌が子供の様に嬉しがつてゐる様子が、その舉動に見えた。僕が圍爐裡のそばに坐つてゐるにも拘らず、殆ど之を意にかけないかのありさまで、たゞそわ／＼と立つたりもたり、——少しも落ちついてゐなかつた。

そこへ通知してあつたのだらう、青木がやつて來た。爐のそばへ來て、僕と家のものらに鳥渡挨拶をしたが、これも落ちつきのない様子であつた。

「まだお宅へはお話してないけれど、けふ私がいよく吉彌を身受け致します。おツ母さんがやつて來るのも、その相談だから、そのつもりで、吉彌に對する一切の勘定書きを拵へて貰ひませう。」

かう云つて、青木が僕の方を見た時には、僕の目に一種の勝利、征服、意趣返し、または誇りとも云ふべき様子が映つたので、ひよつとすると、僕と吉彌の關係を勘づいてゐて、特に金づくで僕に對してこれ見よがしの振りをするのではないかと思はれた。

さらに氣をまはせば、吉彌は僕のことには就いていゝ加減のうそを並べ、うすのろだとか二本棒だとか、焼き餅やきだとか云ふ嬉しがらせを云つて、青木の機嫌を取つてゐるのではないかとも思はれた。どうせ吉彌が僕との關係を正直にうち明す筈はないが、實は全く青木の物になつてゐて、かげでは、二人して僕のことを迂濶な奴、頓馬な奴、助平な奴などあざ笑つてゐるのかも知れないと、僕は非常に不愉快を感じた。

然し、不愉快な顔を見せるのは、焼き餅と見えるから、僕の出來ないことだし、出來ないと云つても、全くこれを心から取り除くことは爲し得なかつた。之を耐へ忍ぶのは、僕がこれまで見せて來た快濶の態度に對しても、實に苦痛であつた。然し、その當面の苦痛は直ぐ取れた。と云ふのは、青木が直ぐ立ちあがつて、二階の方へ行つたからであるが、立ちあがつた時、かたはらの吉彌に目くばせをしたので、吉彌は僕を見て顔を赤らめたまゝ青木の跡について行つた。

僕は知らない風をしてお貞と相對してゐた。

「まア、吉彌さんも結構です、身受けをされたら」と、僕が煙草の煙を吹くと、

「さうだらうとは思つてをつたけれど」と、お貞は長煙管を強くはたきながら、「あいつもよッぽど馬鹿です。なけなしの金を工面して、吉彌を受け出したとこで、國府津に落ちついてをる女ぢやなし、よしまた置いとかうとしたとこで、あいつのかみさんが承知致しません。そんな金があるなら、先づうちの借金を返すがえゝ。——先生、さうでは御座りませんか？」

「そりやア、叔母さんの云ふのも尤もです、然し、まア、男が惚れ込んだ以上は、さうしてやりたくなるんでせうから——」

「吉彌も馬鹿です。男にはのろいし、金使ひにはしまりがなし。あちらに十錢、こちらに一圓、うちで渡す物はどうするのか、方々からいつもその尻がうちへまはつて來ます。」

「歸るものは歸るがえ、さ。」そばから、お君がくやしさに口を出した。
 「馬鹿な子ほど可愛いものだ」と云ふけれど、ほんとうにまたあのお袋が可愛がつてをるので御座ります。」お貞は僕にさも憎々しさに云つた。「あんな者でも、をつて呉れ、ば事がすんで行くけれど、をらなくれば、またその代りを一苦勞せにやららん。——おい、お君、馬鹿どもにお銚子をつけてやんな。」

お君は、あざ笑ひながら、臺どころに働いてゐる母にお爛の用意を命じた。

僕は何だか吉彌もいやになつた、井筒屋もいやになつた。また自分自身をもいやになつた。

僕が歸りかけると、井筒屋の表口に車が二臺ついた。それから降りたのは四十七八の肥えた女——吉彌の母らしい——に、その亭主らしい男。母ばかりではない、おやぢもやつて來たのだ。僕はこらへてゐた不愉快の上に、また何だか、おそろしい様な氣が加はつて、そこ／＼に歸つて來た。

10

吉彌は、よもや、僕が度々勸め、かの女も十分決心したと云つたことも忘れはしまい。よしんば、親が承知しないで、その決心——それも實は當てにならない——をひる返すことがあるにしろ、一度はそれを親どもに話さないことはあるまい。話さへすれば、親の方から僕に何とか相談があるに違

ひない。僕の方に乗り氣になれば、直ぐにも來さうなものだ。いや、若し吉彌がまだ僕のことを知らしてないとすれば、青木の來てゐるところで話し出すわけには行くまい。あいつも随分頼馬な奴だから、青木のゐないところで、鳥渡兩親に含ませるだけの氣は利くまい。全體この話はどうなるだらうと、いろ／＼な考へやら、空想やらが僕のあたまに押し寄せて來て、たゞわ／＼するばかりで、心が落ちつかなかつた。

窓の机に向つて、ゆふがた、獨り物案じに沈み、見るともなしにそとをながめてゐると、暫く忘れてゐたいちぢくの樹が、大きなみづ／＼した青葉と結んでゐる果とを以つて、僕の勞れた目を醒まし、勞れた心を導いて、家のことを思ひ出させた。東京へ歸れば、自分の庭にもそれより大きないちぢくの樹があつて、子供はいつもこッそりそのもつちに行つて、果の青いうちから、竹竿を以つてそれをたたき落すのだが、妻がその音を聴きつけては、急いで出て來て、子供をしかり飛ばす。そんな時には「お父さん」の名が引き合ひに出されるが、僕自分の不平があつたり、苦痛があつたり、寂しみを感じてゐたりする時などには子供の妻は殆ど何の慰めにもならない。一體、わが國の婦人は、外國婦人など、違ひ、子供を持つと、その精魂をその方にばかり傾けて、亭主といふものに對しては、ただ義理的に操ばかりを守つてゐたらいと云ふ考へのものが多い。それでは、社會に活動しようとする男子の心を十分に占領するだけの手段または奮發（僕は之を眞に生きた愛情といふ）がないではな

いか？ 僕は僕の妻を半身不隨の動物としか思へないのだ。いッそ、吉彌を妾にして、女優問題などは断念してしまはうかと思つて見た。

さうだ、さうだ。今の僕には、女優問題などは二の町のことで、もう、迅くに、僕といふ物は吉彌の胸に融けてしまつてゐるのではないか？ 決心を見せろとか、何とか、口では吉彌に強く出てゐるが、その實、僕の心はかの女の思ふまゝになつてゐるのではないか？ いッそ、かの女の思ふまゝになつてゐるくらゐなら、六ヶしい而もあやふやな問題を提出して、吉彌に敬して遠ざけられたり、その親どもにかけで嫌はれたりするよりか、全く一心をあげて、かの女の眞情を動かした方がよからうとも思つた。

僕の胸はいちじくの果よりもやはらかく、僕の心はいちじくの葉よりもろくなつてゐたのだ。

ふと浪の音が聽えて來た。泳ぎに行つて知つてゐるが、長くたわんだ、綺麗な海岸線を洗ふ浪の音だ。さツと云つては押し寄せ、すツと靜かに引きさがる浪の音が遠く聽えた。それに耳を傾けると、そのさツと云つて暫く聽えなくなる間に、僕は何だかたましひを奪はれて行く様な氣がした。それがそのまゝ吉彌の胸ではないかと思つた。

こんな下らない物思ひに沈んでゐるよりも、暫く怠つてゐた海水浴でもして、すべての考へを一新してしまはうかと思ひ付き、先づ、あぐんでゐる身體を自分で引き立て、さんぐに肘を張つて見たり、胸をさすつて見たり、腕をなぐつて見たりしたが、ヤツぱり氣が進まないの、ぐんにやりしたまゝ、机の上につツぶしてしまつた。

「おやッ！」かしらあげると、井筒屋は大景氣で、三味の音がすると同時に、吉彌のうは氣な歌聲がはツきりと聽えて來た。僕は青木の顔と先刻車から出た時の親夫婦の姿とを思ひ浮べた。

一一

その夜はまんじりとも眠れなかつた。三味の音が浪の音に聽えたり、浪の音が三味の音に聽えたり、丸で夢うつゝのうち、に神経が冴えて來て、胸苦しくもあつたし、また何物かあたたまの心をこづいてゐる様な工合ひであつた。明け方になつて、いつのまにか勞れて眠つてしまつたのだらう、目が醒めたら、もう、晝ちかくであつた。

枕もとに手紙が來てゐたので、寢床の中から取つて見ると、妻からのである。云つてやつた金が來たかと、急いで開いて見たが、爲替も何も這入つてゐないので、文句は讀む氣にもならなかつた。それをうツちやる様に投げ出して、床を出た。

楊枝を喰はへて、下に行くと、家のおかみさんが流しもとで何か洗つてゐた手をやすめて、「先生、お早う御座ります」と、笑つた。

「つい寢坊をして」と、僕は平氣で井戸へ行つたが、その朝に限つて井筒屋の垣根を這入ることがこはい様な、おツくうな様な——實に、面白くなかつた。顔を洗ふのもそこ／＼にして、部屋にもどり、朝晝兼帯の飯を喰ひながら、妻から來た手紙を読んで見た。僕の宿つてゐるのは藝者屋の隣りだとは通知してある上に、取り残して來た原稿料の一部を僕が度々取り寄せるので、何か無駄づかひをしてゐると感づいたらしい、——もつとも、僕がそんなことをしたのはこの度ばかりではないから、旅行毎に妻はその心配を豫想してゐるのだ——いゝ加減にして切りあげ、歸つて來て呉れると云ふのであつた。

僕も、馬鹿にされてゐるのかと思ふと、歸りたくならないではなかつたが、然しまた吉彌のことをつき止めなければ歸りたくない氣もした。様子ではどうせ見込みのない女だとは思つてゐても、どこか心の一隅から吉彌を可愛がつてやれといふ命令が下だる様だ。どうともなる様になれ、自分は、どんな難局に當つても、消えることはなく、却つてそれだけの經驗を積むのだと、初めから焼け氣味のある僕だから、意地にもわざと景氣のいゝ手紙を書き、隣りの藝者にはいろ／＼世話になるが、情熱のある女で——とは、そのじつ、うそツ鉢だが——お前に對するよりもずつと深入りが出來ると、妻には云つてやつた。

その手紙を出しに行つた跡へ、吉彌はお袋をつれて僕の室へあがつてゐた。

「先生、母ですよ。」

「さう——おツ母さんですか」と、僕は挨拶をした。

「お留守のところへあがり込んで、どうも濟みませんが、娘がいろ／＼お世話になつて」と、丁寧にさげたあたまを再びあげるところを見ると、心持ちかは知らないが、何だか毒々しいつら附きである。からだは、その娘とは違つて、丈が低く、横にでぶ／＼太つて、豚の體に人の首がついてゐる様だ。それに、口は物を云ふたんびに横へまがる。癩の爲めにさう引きつるのだとは、跡でお袋みづからの説明であつた。

これで國府津へは三度目だが、なか／＼いゝところだとか、僕が避暑がてら勉強するには持つて來いの場所だとか、遊んでゐながら出來る仕事は結構で羨ましいとか、お袋の話はなか／＼まはりくどくつて僕の待ち設けてゐる要領に鳥渡這入りかねた。

吉彌は、たゞにこ／＼しながら、僕の顔とお袋の顔とを順番に見くらべてゐたが、退屈さうにからだを机の上にもたせかけ、片手で机の上の物をいぢくり出した。そして、今しがた僕が讀んで納めた手紙を手に取り、封筒の裏の差出し人の名を見るが早いか、鳥渡顔色を變へ、

「いやアだ」と、はうり出し、「奥さんから來たのだ。」

「これ、何をします！」お袋は體よくつくろつて、「先生、この子は、ほんたうに、人さまに失禮とい

ふことを知らないで困るんですよ。」

「なアに」と、僕は受けたが、その跡はどうあしらつていいのだから、鳥渡まごついた。止むを得ず、「實は」と、僕の方から口を切つて、若し兩親に異議がないなら、してまた本人がその氣になれるなら、吉彌を女優にしたらどうだといふことを勧め、役者なるものは——とても、云つたからとて、分るまいとは思つたが——世間の考へてゐる様な、またこれまでの役者みづからが考へてゐる様な、下品な職業ではないことを簡単に説明してやつた。且、僕がやがて新らしい脚本を書き出し、それを舞臺にのぼす時が來たら、俳優の——殊に女優の——二三名は少くとも抱へて置く必要があるのです、その手はじめになるのだといふことをつけ加へた。

「そりやア御もつともです」と、お袋は相槌を打つて、「そのことはこの子からも聽きましたが、先生が何でもお世話して下ださることで、またこの子の名をあげることであるなら、私どもには不承知なわけは御座いません。」

「お父さんの考へはどうでせう？」

「私どものは、なアに、もう、どうでもいいので、始終私わたたくしが家のことをやきもき致してゐまして、心配こそ掛けることは御座いまして、一つとして頼みにならないので御座いますよ。私は、もう、獨りで、うちのことやら、子供のことやらをあくせくしてゐるので御座います。」

「そりやア、大抵なことぢやアないでせう。——吉彌さんも少しおツ母さんを安心させなきやア——」
「この子がまた、先生、一番意氣地なしで困るんですよ。」お袋は念入りに肩を動かして、さも性根なしとのゝしるかの様子で娘の方を見た。「何でも私に寄りかゝつてゐさへすればいゝと思つて、だゞッ子の様に來てくれい、來てくれいと云つてよこすんです。」

「だッて、來てくれなきやア仕方がないぢやアないか？」吉彌はふくれツ面つらをした。「おツ母さんが來たら、方かたをつけるといふから、早く來いと云つてやつたんぢやアないか？」

「おツ母さんだッて、いろんな用があるよ。お前の妹だッて、また公園で出なけりやアならなくなつたし、さう〜お前のことばかりにかまけてはゐられないよ。半玉はんぎよくの時ぢやアあるまいし、高が五十圓か百圓の身受け相談ぐらゐ、相對づくでも方が附くだらうぢやアないか？ お前よりも妹の方が餘程氣が利きいてるよ。」

「ぢやア、勝手にしやアがれ。」

「あれですもの、先生、ほんとに困ります。これから先生に十分仕込んで戴かなければ、丸でお役に立ちませんよ。」

「なアに、役者になるには年が行き過ぎてゐるくらゐなのですから、いよ〜決心してやるなら、自分でも考へが出るでせう。」

「きイチヤン、シツかりしないといけませんよ」と、お袋はそれでも娘には折れてゐる。
 「あたいだって、たましひはあらア、ね。」吉彌は僕の膝に来て、その上に手枕をして、「あたいの一番好きな人」と、僕の顔を仰向けに見あげた。

僕はきまりが悪い氣がしたが、お袋にうぶな奴と見抜かれるのも不本意であつたから、そ知らぬ振りに見せかけ、

「お父さんにもお目にかゝつて置きたいから、夕飯を向ふのうなぎ屋へ御案内致しませうか？ おツ母さんも一緒に来て下さい。」

「それは何よりの好物です。——ところで、先生、私はこれでもなか／＼苦勞が絶えないんで御座いますよ。娘からお聴きでも御座いませうが、藝者の桂庵といふ仕事は、並み大抵の人には出来ません。二百圓、三百圓、五百圓の代物が二割、三割になるんですから、實入りは悪くもないんですが、あつちこつちへ驅けまはつて買ひ込んだ物を注文主へつれて行くと、あれは善くないから取りかへてくれるの、これは悪くもないがもつと安くしてくれるのと、間に立つものは毎日氣の休まる時が御座いません。それが田舎行きとなると、幾度も往復しなけりやアならないことが御座います。今度だつても、この子の代りを約束しに来たんですよ、それでなければ、どうして、このせちがらい世の中で、ぼんやり出て來られますものですか？」

「代りなど拵へてやらないがいゝや、あんな面白くもない家に」と、吉彌は起きあがつた。

「それが、ねえ、先生、商賣ですもの。」

「そりやア、御もつともで。」

「で、御承知でせうが、青木といふ人の話もあつて、けふ、もう、直きに来て、いよ／＼の決着が分るんで御座いますが、それが定らないと、第一、この子のからだは抜けませんから、ねえ。」

「さうですとも、私の方の問題は役者になればいゝので、吉彌さんがその青木といふ人と以後も關係があらうと、なからうと、それは問ふところはないのです」と、僕の言葉は、まだ金の問題には接近してゐなかつただけに、うはべだけは、兎に角、綺麗な物であつた。

「然し、この子が役者になる時は、先生から入費は一切出して下さる様になるんでせう、ね」と、お袋はぬかりなく念を押した。

「そりやア、さうですとも。」僕は勢よく答へたが、實際、その時になつての用意があるわけでもないから、少し引け氣味があつたので、思はず知らず、「その時ア私がどうともして拵へますから、御安心なさい」と付け加へた。

僕はなる様になれといふ氣であつたのだ。

お袋は、それから、なほ世間話しを初める、その間々にも、僕をおだてる言葉を絶たないと同時に、

自分の自慢話しがあり、金はたまらないが身に絹物をはなさないとか、作者の誰れ彼れ（その芝居も）と僕が同一に見られるのを頗る遺憾に思つたが）はちよく／＼遊びに来るとか、商賣がらでもあるが國府津を初め、日光、静岡、前橋などへも旅行した事があるとかしやべつた。そのうち解けた様な、また一物ある様な腹がまへと、しやべる度毎に歪む口つきとが、僕にはどうも氣になつて、吉彌はあんな母親の拵へた子かと、また／＼厭氣がさした。

一一一

もう、ゆふ飯時だからと思つて、僕は家を出で、井筒屋のかど口から鳥渡吉彌の両親に聲をかけて置いて、一足さきへうなぎ屋へ行つた。うなぎ屋は筋向ふで、時々行つたこともあるし、またそのかみさんがお世辭者だから、僕は遠慮しなかつた。

「おかみさん」と、這入つて行つて、「けふはお客が二人あるから、ね。」

「あの、先刻、吉彌さんからそれは承つて居ります」と、おかみさんは禪の一方をはづした。

「もう、通知してあるのか？ 氣の早い奴だ、なア」と、僕は二階へあがりかけた。

おかみさんは、どうしたのか、あわて、僕を呼び止め、いつもと違つた下座敷へ案内して、「暫くお待ちなさつて——二階が直ぐ明きますから。」

「お客さんか、ね」と、僕は何氣なくそこへ落ちついた。

かみさんが出て行つた跡で、ふと氣がつくと、二階に吉彌の聲がしてゐる。藝者が料理屋へ呼ばれてゐるのは別に不思議はないのだが、實は吉彌の自白に據ると、こゝのかみさんが竊に取り持つて、吉彌とかの小銀行の田島とを近頃接近させてゐたのだ。田島は之が爲めにこの家に大分借金が出来たし、また他の方面でも負財の爲めに頸がまはらなくなつてゐる。僕が吉彌をなじると、

「お金こそ使はしてはやるが」と、かの女は答へた。「田島さんとほかの関係はない、考へて見ても分るだらうぢやアないか、奥さんになつてくれいッて、若しなつて國府津にゐたら、あッちからもこッちからもあたいを闘打ちにする人が出て来るかも知れやアしない、わ。」

「お前はさう方々に罪をつくつてゐるのか」と、僕はつツ込んだことがある。が、兎に角、この地にとゞまつてゐる女でないことだけは分つてゐたから、僕の疑ひは多少安心な方で、既にかの住職にも田島に對する僕の間接な忠告を傳へたくらんであつた。然し、その後も、毎日または隔日には必らず會つてゐる様子だ。かうなれば、男の方では段々焼けッ腹になつて来る上、吉彌の勘定通り、ますます思ひ切れなくなるのは事實だ。それに、或日、吉彌が僕の二階の窓から外をながめてゐた時、「ちよいと、ちよいと」と、手招きをしたので、僕は首を出して、「なんだ」と、大きな聲を出した。

「静かにおしよ」と、かの女は僕を制して、「あれが田島よ」と、小聲。

成る程、鳥渡小意氣だが、にやけた様な男の通つて行くよこ顔が見えた。男ッ振りがいゝとは兼て聴かされてゐたが、色の白い、肌のすべくしてゐるさうな男であつた。その時、僕は、毛穴の立つてゐるおからす藝者を男にしてしまつても、田島を女に見たいと思つたくらゐるだから、僕以前は勿論、今とても、吉彌が實際かれと無關係でゐるとは信じられなくなつた。どうせ、貞操などをかれこれ云ふべきものでないのは勿論のことだが、青木と田島とが出来てゐるのに僕を受け、また僕と青木とがあるのに田島を棄てないなど、考へて來ると、ひいき目があるだけに、僕は旅藝者の腑甲斐なきをつく／＼思ひやつたのである。

その田島がてつきり來てゐるに相違ないと思つたから、僕はこッそり二階のはしご段をあがつて行つた。八疊の座敷が二つある、そのとッ付きの方へ這入り、立てかけてあつた障子のかげに隠れて耳をそば立てた。

「おツ母さんは、ほんとに、どうする氣だよ？」

「どうするか分りやアしない。」

「田村先生とは實際關係がないか？」

「まだ、しつっこい！——あつたら、どうするよ？」

「それぢやア、青木が可哀さうぢやアないか？」

「可哀さうでも、可哀さうでなくツても、さ、あなたのお腹はいためませんよ。」

「ほんとに役者になるのか？」

「なるとも、さ。」

「なつたツて、お前、直きに役に立たないツて、棄てられるに定つてるよ。その時アまたお前の厭な藝者にでもなるよりほかアなからうぜ。」

「そりやア、あたしも考へてまさア、ね。」

「そのくらゐなら、初めから思ひ切つて、おれの云ふ通りになつて呉れよ。」

田島の聲は、見ず轉藝者を馬鹿にしてゐる様な句調ながら、まんざら全く浮薄の調子ではなかつた。また、出来ることなら吉彌を引きとめて、自分の物にしたいといふ相談を持ちかけてゐたらしい。殊に最後の文句などには、深い呼吸が伴つてゐる様に聴えた。その「可哀さうぢやアないか」は、青木を出しに田島自身のことを云つてゐたのだらうが、吉彌は何の思ひやりもなく、大變強く當つてゐた。かの女の淺墓な性質としては、もう、國府津に足を洗ふのは——果してけふ、あすのことだか、どうだか分りもしないのに——大丈夫と思ひ込み、跡は野となれ、山となれ的に樂觀してゐて、田島に對し若し未練がありとすれば、たゞ行きがけの駄賃として二十圓なり、三十圓なりの餞別を貰つてやら

うぐらゐだらう。と、僕には讀めた。

「あたい、ほんたうはお嫁に行くのよ、役者になれるか、どうだか知れやアしないから」など、かの女は云はないでもいゝことをしやべつた。

「どういふ人にだ？」

「區役所のお役人よ——衣物など拵へて、待つてゐるの。」

僕は隣室の状景を想像する心持ちよりも、寧ろこの一言にむかつとした。之が果して事實なら——して、「お嫁に行くの」はさきに僕も聞いたことがあるから、——現在、吉彌の両親は、その定つた話しをもたらしめてゐるのだと思はれた。あの腹の黒い母親のことであるから、それ位のたくらみは爲かねないだらう。

「どうせ、二三十圓の月給取りだらうが、そんな者の鼻アになつてどうするんだ？」

「お前さんの様な借金持ちよりやアいゝ、わ。」

「馬鹿ア云へ！」

「子供の時から知つてゐる人で、前からあたいを貰ひたいツて云つてたの——月給は四十圓でも、お父さんの家がいゝんだから——」

「家はいゝかも知れないが、月給のことはうそだらうぜ——然しだ、さうなりやア、おれ達アみな恨

ツこなした。」

「ぢやア、さうと定めませうよ。」吉彌はうるささうに三味線をじやん／＼引き出した。

「よせ、よせ！」と、三味線をひつたくつたらしい。

「ぢやア、もう、歸つて頂戴よ、何度も云ふ通り、貰ひがかゝつてゐるんだから。」

「歸すなら、歸す様にするがいゝ。」

「どうしたらいゝのよ？」

「かうするんだ。」

「いたいぢやアないか？」

「静かにせい！」この一言の勢ひは、抜き身を以つて這入つて來た強盜でもあるかの様であつた。

「……………」僕はゐたゝまらないで二階を下りて來た。

暫くしてはしご段をとん／＼おりたものがあるので、下座敷からちよつと顔を出すと、吉彌が便所に這入るうしろ姿が見えた。

誰れにでもあゝだらうと思ふと、今更らの様にあの粗い肌が聯想され、僕自身の身の毛もよだつと同時に、自分の心が既に毛深い畜生になつてゐるので、その鋭い鼻がまた別な畜生の尻を嗅いでゐた様な氣がした。

田島が歸ると同時に、入れ代つて、吉彌の兩親が這入つて來た。

「明きましたから、どうぞ二階へ」と、今度はこゝのかみさんから通知して來たので、僕は室を出て、またはしご段をのぼらうとすると、その兩親に出くはした。

「お言葉にあまえて」と、お袋は愛相よく、「先生、そろつてまゐりましたよ。」

「さア、おあがんなさい」と、僕はさきに立つて二階の奥へ通つた。

おやぢといふのは、お袋とは違つて、人のよさうな、その代り甲斐性のなさうな、いつもふところ手をして遊んでゐればいゝといふ様な手合ひらしい。男ツ振りがいゝので、若い時は、お袋の方が惚れ込んで、自分のかせぎ高をみんな男の賭博の負けにつき足しても、なほ他の女に取られまい、取られまいと心配したのだらうと思はれる。年が寄つても、その習慣が直らないで、矢ッばりお袋にばかり世話を焼かせてゐるおやぢらしい。下駄の臺を拵へるのが仕事だと聽いてはゐるが、それも大して骨折るのではあるまい。(一つ忘れてゐたが、お袋の來る時には、必らず僕に似合ふ下駄を持つて來ると云つてゐたが、そのみやげはない様だ。)初對面の挨拶も出來かねた様なあり様で、たゞ窮屈さうに坐つて、申し譯けの膝ツこを並べ、尻は少しも落ちついてゐない様子だ。

「お父さんの風ツたら、ありやアしない。」お袋が斯う云ふと、

「おりやアいつも無禮講で通つてるから」と、おやぢはにやりと赤い齒ぐきまで出して笑つた。

「どうか、おくづしなさい。御遠慮なく」と、僕は先づ膝をくづした。

「お父さんは」と、お袋は却つて無遠慮に云つた、「まア、下駄職に生れて來たんだよ、毎日、あぐらをかいて、臺に向つてればいゝんだ。」

「さう馬鹿にしたもんぢやアないや、ね」と、おやぢはあたまを撫でた。

「御馳走をたべたら、早く歸る方がいゝよ」と、吉彌も笑つてゐる。

「をかしくないのは僕だけであつた。三人に酒を出し、御馳走を供し、その上三人から愚弄されてゐるのではないかと疑へば、このまゝ何も云はないで立ち歸らうかとも思はれた。まして、今しがたまでのこの座敷のことを思ひ浮べれば、何だか胸持ちが悪くなつて來て、自分の身までが全くきたない毛だ物になつてゐる様だ。香ばしい筍の皿も、僕の鼻へは、かの、特に、吉彌が電球に「やまと」の袋をかぶせた時の薄暗い室の、薄暗い肌のにほひを運んで、われながら箸がつけられなかつた。

僕の考へ込んだ心は急に律僧の如く精進癖にとち込められて、甘い、楽しい、愉快だなどいふあかるい方面から、全く遮断された様であつた。

ふと、氣がつくと、まだ日が暮れてゐない。三人は遠慮もなくむしやくやつてゐる。僕は、また、

猪口を口へ運んでゐた。

「先生は御酒ばかりで」と、お袋は座を取り成して、「ちツともおうなは召しあがらないぢやア御座いませんか？」

「やがてやりませう——まあ、一杯、どうです、お父さん」と、僕は銚子てうしを向けた。

「もう、先生、よろしう御座いますよ。うちのは二三杯頂戴すると、あの通りになるんですもの。」

「然し、まだいゝでせう——？」

「いや、もう、この通り」と、おやぢは今まで辛抱してゐた膝ツこを延ばして、ころりと横になり、

「あゝ、もう、かう云ふところで、かうして、お花でも引いてゐたら申し分はないが——」

「お父さんは直きあれだから困るんです。お花だけでも、先生、私の心配は絶えないんですよ。」

「さう云つたつて、ほかにおれの楽しみはないから仕やうがない、さ。」

「あの人も矢ツぱし来るの？」吉彌がお袋に意味ありげの目を向けた。

「あゝ、来るよ。」お袋は軽く答へて、僕の方に向き直りなほ、「先生、お父さんはもう歸していゝでせうと」

「そこは御隨意になすつて貰ひませう。——御窮屈なら、お父さん、おさきへ御飯を持つて來させますから」と、僕は手をたゝいて飯を呼んだ。

「お父さんは御飯を頂戴したら、直ぐお歸りよ」と、お袋はその世話をしてやつた。

僕は女優問題など全く撤回しようかと思つたくらゐだし、こんなおやぢに話したつて要領を得ないと考へたので、いゝ加減のところまで切りあげて置いたのだ。

飯を獨りすませてから、獨りで歸つて行くのらくらおやぢの姿がはしご段から消えると、僕の目に入れ代つて映じて來るまぼろしは、吉彌の所謂「あの人」であつた。ひよツとしたら、これが乃ち區役所の役人で、吉彌の歸京を待つてゐる者——たび／＼花を引きに來るので、おやぢのお氣に入りになつてゐるのかも知れないと推察された。

一四

その跡に残つたのはお袋と吉彌と僕との三人であつた。

「この方が水入らずでいゝ、わ」と、お袋は娘の顔を見た。

「青木は來たの？」吉彌はまた母の顔をちツと見つめた。

「あゝ、來たよ。」

「相談は定つて？」

「甘く行かないの、さ。」

「あたゐ、厭だ、わ！」吉彌は顔いろを變へた。「だから、シツかりやつて頂戴と云つて置いたぢやアないか？」

「さう無氣になつたツて仕やうがない、わ、ね。おツ母さんだツて、抜かりはないが、向ふがまだ險呑がつてゐりやア、考へるのも當り前だア、ね。」

「何が當り前だア、ね？ 初めから引かしてやると云ふんで、毎月、毎月妾の様にされても、成りたけお金を使はせまいと、僅かしか小遣も貰はなかつたんだらうぢやないか？ 人を馬鹿にしやアがつたら、承知アしない、わ。あのがらくた店へ怒鳴り込んでやる！」

「さう、目の色まで變へないで、さ——先生の前ぢやアないか、ね。實は、ね、半分だけあす渡すと云ふんだよ。」

「半分ぐらゐ仕やうがないよ、しみツたれな！」

「それがかうなんだよ、お前を引かせる以上は青木さん獨りを思つてゐて貰ひたい——」

「そんなおたんちぢやアないよ。」

「まア、お聴きよ」と、お袋は招き猫を見た様な手眞似をして娘を制しながら、「さう來るのア向ふの順ぢやアないか？ 何でもはいくツて云つてりやいゝんだア、ね。——『そりやア御もつとも』と、返事をするよ、ね、お前のことに附いて少し疑はしい點があると——」

「先生にやア關係がないと云つてあるのに。」

「いゝえ、この方は大丈夫だが、ね、それ——」

「田島だツて、もう、迅くに手を切ツたつて云つてあるよ。」

「畜生！」僕は腹の中で叫んだ。

「それが、お前、焼き餅だア、ね」と、お袋は、實際のところを承知してゐるのか、ゐないのか分らないが、そらとぼけた様な笑ひ顔。「つとめをしてゐる間は、お座敷へ出るにやア、こツちからお客の好き嫌ひはしてゐられないが、そこは氣を利かして、さ——ねえ、先生、さうぢやア御座いませんか？」

「そりやア、さうです」と、僕は進まないがらの返事。

「實は、ね」と、吉彌はしまりなくにこつき出して、「こんなことがあつたのよ。このお座敷に青木さんがゐて、下に田島が來てゐたの。あたゐ、兩方のかけ持ちでせう、上したの焼き持ち責めで困つちまつた、わ。田島がわざと跡から攻めかけて來て、焼け飲みをしたんでせう、酔ッばらツちまつて聴えよがしに歌つたの、『青木の馬鹿野郎』なんかんで。青木さんは年を取つてゐるだけにおとなしいんで、さきへ歸つて貰つた、わ。」

かう話しながらも、吉彌はたツた今あつたことを僕が知つてゐるとは思はないので、十分僕に氣を

許してゐる様子であつた。僕は、吉彌とお袋との鼻をあかす爲めに、すツぱり腹をたち割つて、僕の思ひ切りがいゝところを見せてやりたいくらいであつたが、しみツたれた男が二人も出来てゐるところへ、また一人加はつたと思はれるのが厭さに、何のこともない風で通してゐた。

「そんなことのない様にするのが」と、お袋は僕に向つて、「藝者のつとめぢやア御座いませんか？」
「大きにさうです、ね。」僕は斯う答へたが、心では、「藝者どころか、女郎や地獄の腕前もない奴だ」と、卑しんでゐた。

「あたいばかり責めたツて、仕やうがないだらうぢやないか？」吉彌はそのまなじりをつるしあげた。それに、時々、かの女の口が歪む工合は、お袋さながらだと見えた。

「まア、すんだことはいゝとして、さ」と、お袋は娘をなだめる様に、「これから暫く大事だから、よく氣をおつけなさい。——先生にも頼んで置きたいんです、の。如才は御座いますまいが、青木さんが、井筒屋の方を濟ましてくれるまで、——今月の末には必らずその残りを渡すと云ふんですから——この月一杯は大事な時で御座います。お互ひに、ね、向ふへ感づかれない様に——」と、僕と吉彌とを心配さうに見まはした様子には、さすが、親としての威厳があつた。

「そりやア勿論です」と、僕はまた答へた。僕は棄てツ鉢に飲んだ酒が大分まはつて來たので、張り詰めてゐた氣も急にゆるみ、厭なほひも身におぼえなくなり、年取つた女がゐるのは自分の母の如

く思はれた。また、吉彌の坐つてゐるのがふらく動く様に見えるので、恰も遠いところの雲の上に、普賢菩薩が住してゐるやうで、その酔ひの出た爲めに、頬の白粉の下から、ほんのり赤い色がさす様子など、如何にも美しくツて、可愛らしくツて、僕の十四五年以前のことを思ひ出さしめた。

僕は十四五年以前に、現在の妻を貰つたのだ。僕よりも少し年上だけに、不斷はしツかりしたところのある女だが、結婚の席へ出た時の妻を思へば、一二杯の祝盃に顔が赤くなつて、その場にゐた、まらなくなつた程の可愛らしい花嫁であつた。僕は、今、目の前にその昔の妻のおもかげを見てゐた。そのうちにランプがついたのに氣がつかなくかつた。

「先生はひどく考へ込んでいらツしやるの、ね」と、お袋の言葉に僕は楽しい夢を破られた様な氣がした。

「大分酔つたんです」と、僕はからだを横に投げた。

「きいちゃん」と、お袋は娘に目くばせをした。

「しツかりなさいよ、先生。」吉彌は立つて來て、僕に酌をした。かの女は僕を、もう、手のうちにまゐめてゐると思つてゐたのか、たゞ氣儘勝手に箸を取つてゐて、お酌はお袋に殆どまかしツ切りであつたのだ。

「きいちゃん、お弾きよ——先生、少し陽氣に行きましようぢやア御座いませんか？」

吉彌のじゃんくが初まつた。僕は聴きたくもないので、「まア、お待ち」と、それを制し、「まだお前の踊りを見たことがないんだから、おッ母さんに弾いてもらつて、一つ僕に見せて貰はう。」

「暫く踊らないんですもの」と、吉彌は、僕を見て、膝に三味をのせたまゝでからだを横にひねつた。「……………」僕は、年の行かない娘が踊りのお稽古の行きや歸りにだだを捏る時のやうすを聯想しながら、「おぼえてゐる物をやつたらいいぢやないか？」

「だつて」と、またからだを振ると同時に、左の手を天心の方に行かせて、暫く言葉を切つたが、——「こんな大きななりぢやア踊れない、わ。」

「お酌のつもりになつて、さ」とは、僕が、かの女のますく無邪氣な様子に引き入れられて、思はず出した言葉だ。

「さういふ注文は困る、わ。」吉彌は訴へる様にお袋をながめた。

「ぢやア」と、お袋は娘と僕とを半々に見て、「私に弾けなくつても困るから、やさしい物を一つやつて御覽。——『わが物』がいい、傘は持つてることにして、さ。」三味線を娘から受け取つて、調子を締めた。

「まるで子供の様だ、わ。」吉彌ははにかんで立ち上り、身構へをした。

お袋の糸はなか／＼シツかりしてゐる。

「わがアものアオと」の歌につれて、吉彌は踊り出したが、踊りながらも、「何だかきまりが悪い、わ」と云つた。

そのはにかんでゐる様子は、今日まで多くの男をだまして來た女とは露ほども見えないで、清淨無垢の乙女がその衣物を一枚々々剝がれて行く様な優しさであつた。僕が畜生とまで嗅ぎつけた女にそんな優しきがあるのかと、上手下手を見分ける餘裕もなく、僕はたゞぼんやり見惚れてゐるうちに、「待つウ身にイ、つらアアき、置きイごたアアつ」も通り抜けて、終りになり、踊り手は疊に手を突いて、しとやかにお辭儀をした。斯うして踊つて來た時代もあつたのかと思ふと、僕はその頸ツ玉に抱きついてやりたい程であつた。

「もう、御免よ。」吉彌は初めて年増にふさはしい發言をして自分自身の膳にもどり、猪口を拾つて、「おッ母さん。一杯お駄賃に頂戴よ。」

「さア、僕が注いでやらう」と、僕は手近の銚子を出した。

「それでも」と、お袋は三味を横へおろして、

「よく覚えてゐるだけ感心だ、わ。——先生、この子がおッ師匠さんのところへ通ふ時ア、困りましたよ。自分の身に附くお稽古なんだに、人の仕事でもして來た様にお駄賃を呉れいでも。今以て

その癖は直りません、わ。何だといふと、直ぐお金を送つて呉れい——」

「さうねだりやアしない、わ」と、吉彌はほゝゑんだ。

「……………」また金の話かと、僕はもうそんなことは聴きたくないから、直ぐみんなで飯を喰つた。

一五

お袋は一足さきへ歸つたので、吉彌と僕とのさし向ひだ。かうなると、こらへてゐた胸が急にみなぎつて来た。

「先生にかうおごらして濟まない、わ、ねえ」と、可愛い目つきで吉彌が僕をながめたのに答へて、

「馬鹿！」と一聲、僕は強く重い鬱忿をあげせかけた。

「そのこはい目！」暫く吉彌は見つめてゐたが、「どうしたのよ」と、かほをしかめて僕にすり寄つて来た。

「えゝッ、穢れる、わい！」僕はこれを押し除けて、にらみ付け、「知らないと思つて、どこまで人を馬鹿にしやアがるんだい？ さツき、おれがこゝへ来るまでのこゝのざまツたら何だ？」

吉彌は鳥渡ぎやふんとした様子であつたが、あずまひを直して、

「聴いてたの？」と、きまりが悪い様子。

「聴いてたどころか、隣りの座敷で見てゐたも同然だい！」

「あたい、何も田島さんを好いてやしない、わ。」

「もう、好く好かないの問題ぢやアない、病氣がうつる問題だよ。」

「そんな物ア迅くに直つてる、わ。」

「分るもんか？ 貴様の口のはたも、どこの馬の骨か分りもしない奴の毒を受けた結果だぞ。」

云つて置かなかつたが、かの女の口のはたの爛れが直つたり、出来たりするのは、僕の初めから氣にしてゐたところであつた。それに、時々、その活きくした目がかすむのを井筒屋のお貞が悪口で、微毒性のそこひが出るのだと聴いてゐたのが、今更ら思ひ出されて、僕はぞツとした。

「寛恕して頂戴よ」と、僕の胸に身を投げて来た吉彌をつき拂ひ、僕はつツ立ちあがり、

「おツ母さんにさう云つて貰はう、僕も男だから、おツ母さんに約束したことは、お前の方で筋道さへ踏んで来りやア、必らず實行する。然し、お前の身の腐れはお前の魂から入れ變へなけりやア、到底、直りツこはないんだ。——これは何も焼き餅から云ふんぢやアない、お前の爲めを思つて云ふんだ。」

怒りはしたものの、僕は涙がこぼれた。それとなく、ハンケチを出して目を拭きながら座敷を出た。出てから鳥渡ふり返つて見たが、かの女は——分つたのか、分らないのか、——突き放されたまゝの

位置で、疊に左の手を突き、その方の袂の端を右の手で口へ持つて行つた。目は疊に向いてゐた。

その翌日、午前中に、吉彌の両親はいとま乞ひに来た。僕が吉彌をしかりつけた——これを吉彌はお袋に告げたか、どうか——に對する挨拶などは、別に無かつた。兎に角、僕は一種不愉快な壓迫を免れた様な氣がして、女優問題をも成るべく僕の心に思ひ浮べない様にしようと定めた。且、これからは僕から弱く出てかれこれ云ふには及ばない、吉彌に性根があつたら、向ふから何とか云つて來るだらう、それを待つてゐるに如くはないと考へた。

「先生も御如才はないでしょうが——この月中が肝心ですから、ね」と、お袋の別れの言葉はまた斯うであつた。

「無論ですとも」と答へたが、僕はあとで無論もくそもあつたものかと云ふ反抗心が起つた。そして、それでもなほ實は、吉彌がその両親を見送りに行つた歸りに、立ち寄るのが本統だらうと、外出もしないで待つてゐたが、吉彌は來なかつた。晝から來るかとの心待ちも無駄であつた。その夜もとうとう見えなかつた。

そのまたあくる日も、日が暮れるまで待つてゐたが、來なかつた。もうお座敷に行つたらうから駄目だと、——そして、井筒屋ははやらないが、井筒屋の獨り藝者は外へ出てはやりッ子なんだから、——あきらめて、書見でもしようと、半分以上は読み終つてあるメレジョウスキの小説「先驅者」を

手に取つた。國府津へ落ちついた當座は、面白半分一氣に読みつゞけて、そこまでは進んだが、僕の氣が浮かれ出してからは、殆ど全く之を忘れてゐたあり様であつたのだ。この書の主人公レオナドダピンチの獨身生活が今更らの如く懐しくなつた。

仰向けに枕して読みかけたが、ふと氣がつくと、月が座敷中にその光を廣げてゐる。おもてに面した方の窓は障子をはづしてあつたので、これは危険だといふ考へが浮んだ。こないだから持つてゐた考へだが、——吉彌の關係者は幾人もあるか分らないのだから、僕は旅の者だけに最も多くの恨みを買い易いのである。いつ如何なる者から闇打ちを喰らはされるかも知れない。人通りのない時、よしんば出來心にしろ、石でもほうり込まれ、怪我でもしたら詰らないと思ひ、起きあがつて、窓の障子を填め、左右を少しあけて置いて、再び枕の上に仰向けになつた。

心が散亂してゐて一點に集らないのだ、眼は開いたページの上に注がれても、何を讀んでゐるのか締りがなかつた。それでもじつと読みつゞけてゐると、新しい事件は出て來ないで、レオナドと吉彌とが僕の心をはる／＼通過する。一方は溢れるばかりの思想と感情とを古典的な行動に包んだ老獨身者のおもかげだ。また一方はその性情が全く非古典的である上に、無神經と思はれるまでも心の荒んだ賣女の姿だ。この二つが、まはり燈籠の様に僕の心のかはる／＼映つて來るのである。

一方は、燃ゆるが如き新情想を多能多才の器に包み、一生の寂しみをうち籠めた戀をさへ云ひ現は

し得ないで終つてしまつた。その生涯は如何に高尚である、典雅である、純潔である。僕が家庭の面倒や、女の關係や、またさう云ふことに附隨して來るさまざまの苦痛と疲勞とを考へれば、いッそのこと、レオナドの様に、獨身で、高潔に通した方が幸福であつたかと、何となく懐しい様な氣がする。然し、また考へると、高潔でよく引き締つた半僧生活は、拾數年前、既に、僕は思想と實驗との上で通り抜けて來たのだ。そんな初々しいことで、現在の僕が満足出來ないのは分り切つてゐる。僕の神經はレオナドの神經より五倍も十倍も過敏になつてゐるだらう。

かう思ふと、また、古寺の墓場の様に荒廢した胸の中のにほひがして來て、そのくさい空氣に、吉彌の姿が時を得顔に浮んで來る。そのなよ／＼した姿のほゝゑみが血球となつて、僕の血管を循環するののか、僕は筋肉がゆるんで、がツかり疲勞し、手も不斷よりは重く、足も常よりは倦怠いのおぼえた。

僕の過敏な心と身體とは荒んでゐるのだ。延びてゐるのだ。固まつてゐた物が融けて行く様に、立ち据わる力がなくなつて、下へ／＼と重みが加はつたのだらう、墮落、荒廢、倦怠、疲勞——僕は、デカダンと云ふ分野に放浪するのを、寧ろ僕の誇りとしようといふ氣が起つた。

「先驅者」を手から落したら、レオナドはゐなくなつたが、吉彌ばかりはまだ僕を去らない。

かの女は無努力、無神經の、たゞ形ばかりのデカダンだ、僕等の考へとは違つて、實力がない。中

味がない、本體がない。かう思ふと、これも亦厭になつて、僕は半ばからだを起した。さうすると、吉彌も亦僕の心眼を往來しなくなつた。

暑くツて堪らないので、無やみにうちはを使つてゐると、どこからか、

「寛恕して頂戴よ」といふ優しい聲が聽える。然しその聲の主はまだ來ないのであつた。

一六

僕が強く當つたので、向ふは焼けになり、

「ぢやア勝手にしろ」といふ氣になつたのではあるまいか？ それなら、僕から行かなければ永劫に會へる筈はない。會はないなら、會はない方が僕に取つてもいゝのだが、まさか、向ふはさうまで思ひ切りのいゝ女でもなからう。あの馬鹿女郎め、今頃はどこに何をしてゐるか、一つ探偵をしてやらうと、うちはを持つたまゝ、散歩がてら、僕はそとへ出た。

井筒屋の店さきには、吉彌が見えなかつた。

寝ころんでゐたせゐもあらう、あたまは重く、目は充血して腫れぼつたい。それに、近頃は運動もしないで、家にばかり閉ぢ籠り、——机に向つて考へ込んでゐたり——それでなければ、酒を飲んでゐたり——ばかりするのであるから、足がひよろ／＼してゐる。涼しく吹いて來る風に、僕はからだ

が浮きさうであつた。

でこぼこした道を踏みしめ、踏みしめ、僕は歩いてゐたが、街道を通る人かげがすべて僕の敵であるかの様に思はれた。月光に投げ出した僕の影法師も、僕には何だかおそろしかつた。

成るべく通行者に近よらない様にして、僕は先づ例のうなぎ屋の前を通つた。三味の音や歌聲は聴えるが、吉彌のではない。ゐないのか知らんと、ほかに當てのある近所の料理屋の前を二三軒通つて見た。そこいらにもゐさうもない様な氣がした。

青木の本陣とも云ふべきは、二三丁さきの里見亭だ。渠は、吉彌との關係上初めは井筒屋のお得意であつたが、借金が嵩んで敷居が高くなるに従つて、かのうなぎ屋の常客となつた。然し、そのおかみさんが吉彌を田島に取り持つたことが分つてから、また里見亭に轉じたのだ。そこでしくじつたら、また、もう少ししかけ隔つた別な店へ移るのだらう。はたから見ると、段々退却して行くあり様だ。吉彌の話したことに據ると青木は、渠自身が、

「無學な上に年を取つてゐるから、若いものに馬鹿にされたり、また、自分が一生懸命になつてゐる女にまでも謀叛されたりするのだ」と、男泣きに泣いたさうだ。

或時など渠は、思ひ物の心を試めさうとして、吉彌に、その同じ商賣子で、ズツと年若なのを——吉彌の合ひ手に呼んでゐたから——取り持つて見よと命じた。吉彌は平氣で命令通り向ふの子を承知

させ、青木をかげへ呼んでその旨を報告した。

「姉さんさへ承知ならツて——大丈夫よ。」

「……………」青木は、然しさう聴いて却つて之を残念がり、實は本意でない。お前はそんなことをされても何ともないほどの薄情女か、と立つてゐる吉彌の肩をしっかりいだき締めて、力一杯の誠意を見せようとしたこともあるさうだ。思ひやると、この放蕩おやぢでも實があつて、可哀さうだ。吉彌こそそんな——馬鹿々々しい手段だが——熱のある情けにも感じ得ない無神經者——不實者——。

かういふことを考へながら、僕も亦その無神經者——不實者——を追つて、里見亭の前へ來た。いつも不景氣な家だが、相變らずひっそりしてゐる。ゐさうにもない。併しまたこっそり乳くり合つてゐるのかも知れないと思へば、急に僕の血は逆上して、あたまが燃え出す様に熱して來た。

僕は、數丈のうはばみかべろく赤い舌を出し、この家のうちを狙つて巻き附くかの様な思ひを以つて、裏手へまはつた。

裏手は田圃である、ズツと遠くまで並び立つた稻の穂は、風に靡いてきら／＼光つてゐる。僕は涼風の如く軽くなり、月光の如く形なく、里見亭の裏二階へ忍んで行きたかつた。然し、板壁に映つた自分の黒い影が、どうも、邪魔になつて堪らない。

その影を取り去つてしまはうとするかの様に、僕はこは／＼一まはりして、また街道へ出た。

もとの道を自分の家の方へ歩んで行くと、暗いところがあつたり、明るいところがあつたり、ランプのあかりがさしたり、電燈の光が照らしたり、——その明暗幽照にまでも道のでこぼこが出来て——ちらつく眼鏡越しの近眼の目さきや、あぶなツかしい足もとから、全く別な世界が開けた。戸々に立ち働いてゐる黒い影は地獄の兵卒の如く、——戸々の店さきに一樣に黒く並んでるかな物、荒物、野菜などは鬼の持ち物、喰ひ物の如く、——僕はいつの間にも墓場、黄泉の臺どころを嗅ぎ當ててゐたのかと不思議に思つた。

たま／＼、鼻唄を歌つて通るものに會ふと、その聲からして死んだものらの腐つた肉のほひが聽かれる様だ。

僕は、——たとへば、伊邪那岐の尊となつて——死人のほひがする薄暗い地獄の勝手口まで、女を追つてゐた様な氣がして、家に歸つた。

時計を見ると、もう、十時半だ。然し、まだ暑いので、褥を取る氣にはならない。仰向けに倒れて力抜けがした全身をぐツたり、その手足に延ばした。

そこへ何物か表から飛んで来て、裏窓の壁に當つてはね返り、ごろ／＼とはしご段を轉げ落ちた。迷ひ鳥にしては、餘りに無謀過ぎ、餘りに重みがあり過ぎたやうだ。

ぎよツとしたが、僕は直ぐおもて窓をあけ、

「……………」誰れだ？ と、いつものやうな大きな聲を出さうとしたら、下の方から、

「静かに／＼と、聲ではなく、たゞ制する手振りをした女が見える。吉彌だ。

僕は直ぐ二階をおりて外へ出た。

「……………」まだ物を云はなかつた。

「びツくりして？」先づ、平生通りの調子で小だわりのない聲を出したかの女の酔つた様子が、なよなよした優しい輪郭を、月の光で地上にまでも引いてゐる。

「また青木だらう？」

「いゝえ、これから行くの。」

「ぢやア、早く行きやアがれ！」僕はわざとひどくかの女を突き放つて今夜も駄目だとあきらめた。

「もう一つあげませうか？」かの女は今一つ持つてゐた林檎を出した。

「……………」僕は黙つてそれを奪ひ取つてから、つか／＼と家に這入つた。

一七

その後、吉彌に會ふ度毎に、おこつて見たり、冷かして見たり、笑つて見たり、可愛がつて見たり——こツちでも要領を得なければ、向ふでもその場、その場の商賣振り。僕はお袋が立つ時にくれぐ

れ注意したことなどは全く無頓着になつてゐた。

東京からは、もう、金は送らないで妻が焼け半分の厭みツたらしい文句ばかりを云つて来る。僕はそのふくれてゐる様子を想像出来ないではないが、入りもしない反動心が起つて来ると同時に、今度の事件には僕に最も新しい生命を與へる戀——そして、妻には決して望めないの——が含んでゐる様にも思はれた。それで、妾にしても藝者をつれて歸るかも知れないが、お前達（親にも知らしてあると思つたから、暗にそれをも含めて）には決して心配はかけないといふ返事を出した。

僕があがるのはいつも井筒屋だが、吉彌と僕との關係を最も早く感づいたのは、そこのお君である。皮肉にも、隣りの室に忍び込んで、すべてを探偵したらしく、あつたまゝの事實を並べて、吉彌を面と向つていぢめたさうだ。

吉彌は之が癪にさはつたとかで、自分のうちのお客に對し、立ち聴きするなどは失禮ではないかとおこり返したさうだが、そのいぢめ方が不斷の様に蔭辨慶的なお君と違つてゐたので、

「あの小まツちやくれも、もう年頃だから、焼いてるんだ、わ」と、吉彌は僕の胸をぶつた。

「まさか、そんなわけぢやアあるまい」と、僕は答へた。

然し、それから、お君は英語を習ひに來なくなつたのは事實だ。

僕も、これが動機となつて、いくらかきまりが悪くなつたのに加へて、自分の愛する者が年の若い娘にいぢめられるところなどへ行きたくなくなつた。また、お貞が、僕の顔さへ見れば、吉彌の悪口をつくののは、あんな下司な女を僕があげこすすれ、まさか、關係してゐるとは思はなかつたからでもあらうが、それにしては、知つた以上、僕をも下司な者に見爲すのは知れ切つてゐるから、行かない方がいゝと思ひ定めた。それで、吉彌を呼べば、うなぎ屋へ呼んだが、飲みに行く度数がもとの様には多くなかつた。

勉強をする時間が出來たわけだが、目的の脚本は少しも筆が取れないで、却て讀み終つたメレジコウスキの小説を縮少して、新情想を包んだ一大古典家、レオナドダギンチの高潔にして而も恨み多き生涯を紹介的に書き初めた。

或晩のこと、虚心になつて筆を走らせてゐると、吉彌がはしご段をとん／＼あがつて來た。

「……………」何も云はず直ぐ僕にすがり附いてわツと泣き出した。餘り突然のことだから、

「どうしたのだ？」と、思はず大きな聲をして、僕はかの女の片手を取つた。

「……………」かの女は僕に片手をまかせたまゝで暫く僕の膝の上につつ伏してゐたが、やがて、あたまをあげて、その喰はへてゐた袖を離し、「青木と喧嘩したの。」

「なアんだ」と、僕は手を離した。「乳くり合つたあげくの喧嘩だらう。それをおれのところへ持つて來たツて、どうするんだ？」

「分つてしまつた、わ。」

「何が、さ？」僕はとぼけて見せたが、青木に嗅ぎつけられたのだとは直観した。

「何がツて、ゆうべ、うなぎ屋の裏口からこつそり這入つて来て、立ち聴きしたと、さ。」——では、先夜の僕がゆうべの青木になつたのだ。また、うはばみの赤い舌がべろ／＼僕の前に見える様だ。僕は之を胸に押さへて平氣を装ひ、

「それがつらいのか？」

「どうしても、疑はしいツて聴かないんだもの、癢にさはつたから、みんな云つちまつた——『あなたのお世話にやならない』て。」

「それでいゝぢやアないか？」

「ぢやア、向ふがこれからのお世話は斷わると云ふんだが、いゝの？」

「跡の始末はあなたが附けて呉れて？」

「知れたこつた」と、僕は覺悟した。

かういふことにならないうち、早く切りあげようかとも思つたのだが、來べき金が來ないので、ひとは動きがつかなくつたのだ。然し、もう、かうなつた以上は、僕も手を引くのをいさぎよしとし

ない。僕は意外に心が据つた。

「もう少し書いたら行くから、さきへ歸つてゐな」と、僕は一足さきへ吉彌を歸した。

一八

やがて井筒屋へ行くと、吉彌とお貞と主人とが圍爐裡を取り巻いて坐つてゐる。お君や正ちゃんは何も知らずに寝てゐるらしい。主人はどういふ風になるだらうと心配してゐた様子、吉彌は存外平氣である。お貞が先づ口を切つた。

「先生、飛んだことになりました、なア」と、飽くまで事情を知らない振りで、「あなたさまに御心配かけては濟みませんけれど——」

「なアに、かうなつたら、私が引き受けてやりませア。」

「濟まないこつて御座いますけれど——吉彌が悪いのだ、向ふをおこらさないで、そつとして置けばいゝのに。」

「向ふからほぢくり出すのだから、仕やうがない、わ。」

「もう、出來たことは何と云つても取り返しをつく筈がない。すつかり私におまかせ下さい」と、僕は男らしく斷言した。

「然し」と、主人が堅苦しい調子で、「世間へ、あの人の物と世間へ知れてしまつては、藝者が賣れま
せんから、なア——また出来ない様なことがあつては、こちらが困るばかりで——」
「そりやア、もう、大丈夫ですよ」と、僕は軽く答へたが、餘り人を見くびつた云ひ分を不快に感じ
た。

然し、割合にすれてゐない主人のことであるし、またその無愛嬌なしがみツ面は持ち前のことであ
るから、思つたまゝを云つたのだらうと推察してやれば、僕も多少正直な心になつた。

「どうともして」とは、實際、何とか工面をしなければならぬのだ、「必らず御心配はかけません
が、青木さんの方が成り立つてゐても、今月一杯はかゝるんでしたから——そこいらの日限は、どう
か、よろしく」と、念を押した。

「それは勿論のことです。」主人は鳥渡にこついて見せたが、また持ち前のしがみツ面に返つて、「青
木があの時揃へて出してしまへばよかつたに、なア」と、お貞の方をふり向いた。

「あいつがしみツたれだから、さ。」お貞は煙管をはいた。

「一杯飲まうか？」もう分つたらうと思つたから、僕は、吉彌を促がし、二階へあがつた。

「泣いたんでびっくりしたでせう？」吉彌は僕と相向つて坐つた時に斯う云つた。

74 「なアに。」僕は吉彌の誇張的な態度をわざとらしく思つてゐたので、澄まして答へた。「お前の目玉
に水ツ氣が少しもなかつたよ。」

75 硯と巻き紙とを呼んで、僕は飲みながら、先輩の某氏に當て、金の工面を頼む手紙を書いた。そ
の手紙には、一藝者があつて、年は二十七——顔立ちは良くないし、三味線も甘くないが、踊りが得
意（これは吉彌の云つた通りを信じて云ふのだ）——普通の婦人とは違つて丈がずつと高く——目と
口とが大きいので、仕込みさへすれば、女優として申し分のない女だ。且、その子供が一人ある、ま
た妹がある。それらをも引き入れることが出来る望みがある。失敗は豫め覺悟の上でつれて歸りたい
から、それに必要な百五十圓ばかりを一時立て換へて貰ひたいと頼んだ。その全體に於て、さきに劇
場にある友人に紹介した時よりも熱がさめてゐたので、調子が冷靜であつた。無論、友人に對する考
へと先輩に對する心持ちとは、また、違つてゐたのだ。たゞ、心配なのは承知して呉れるか、どうか
といふことだ。

「もう、書けたの？」吉彌は待ちどほしさに尋ねた。

「あゝ」と、僕の返事には力がなかつた。

僕は寝ころんでがぶ／＼三四杯を獨りで傾けた。

「あたかも書かう」と、吉彌が今度は筆を取り、僕の投げ出した足を尻に敷いて、肘をつき、頻りに
何か書き出した。

僕は手をたゝいて人を呼び、まだ起きてゐるだらうからと、印紙を買つて投函することを命じた。一つは、その家族を安心させる爲めであつたが、若し出来ない返事が来たらどうしようと、心は息詰る様に苦しかった。

「……………」吉彌も亦短い手紙を書きあげたのを、自慢さうだ——

「どれ見せろ」と僕は取つて見た。

下手くそな假名文字だが、漸とその意だけは通じてゐる。さきに僕がかの女のお袋に尋ねて、吉彌は小學校を出たかといふと、學校へはやらなかつたので、僅かに新聞を拾ひ読みすることが出来るから、役者になつてもせりふの覚えが悪からうと答へた。すると吉彌がそばから、

「まさか、絶句はしない、わ」と、答へたのを思ひ出した。

「しばらく御ぶさた致し候。まづはおかほりもなく、御つとめなされ候よし、かげながら祝し居候。さてとや、このほどよりの御はなし、母よりうけたまはり、うれしく存じ候。」

てツきり、例の區役所先生に送るのだと分つた。「うれしく」とは、一緒になることが定つてゐるのだらう。もつとも、僕はその人が承知して女優になるのを許せば、それでかまはないとも考へてゐたのだ。

そのつゞき、——

「ちかきうちに私も歸り申し候につき、くはしきことはお目もじの上申しあげさふらふ。かしく。きくより。」

菊とは吉彌の本名だ。さすが、當て名は書いてない。

「馬鹿野郎！ 人の前でのろけを書きやアがつた、な。」

「のろけぢやアないことよ、御無沙汰してゐるから、お詫びの手紙だ、わ。」

「母より承はり、うれしく」だ——當て名を書け、當て名を！ 隠したツて知れてらア。」

「ぢやア、書く、わ。」笑ひながら、「うは封を書いて頂戴よ」と云つて、かの女の筆を入れたのは「野澤さま」といふのである。

僕はその封筒のおもてに淺草區千束町〇丁目〇番地渡瀬（これは吉彌の家）方野澤様と記してやつた。かの女はその人を子供の時から知つてると云ひながら、その呼び名とその宿所を知つてゐないのであつた。

「……………」さきの偽筆は自分の爲めに利益と見えたことだが、今のは自分の不利益になる事件が含まんでゐる代筆だ。僕は、何事も成る様になれといふつもりで、苦しい胸を押へてゐた。が、表面では、さう沈んだ様には見せたくなかつたので、からかひ半分に、「區役所が一番戀しいだらう？」

「いゝえ。」吉彌はにっこりしたが、口を歪めて、「あたゐ、矢ッぱし青木さんが一番可愛い、わ——

實があつて——長く世話をかけたんだもの。」

「ぢやア、僕はどうなるんだ？」

「これからは、あなたの」と、吉彌は僕の寝ころんでゐる胸の上に自分の肩までもからだをもたせかけて、頸を二音づつに動かしながら、「め——か——け。」

十二時まで、僕等はぐづついてゐたら、お貞が出て来て、もう、時間だから、引きあげて呉れろといふ頼みであつた。僕は、立ちあがると、あたまがぐら／＼ツとして、足がひよろついた。

あふないと思つたからでもあらう、吉彌が僕を僕の門口まで送つて来た。月のいゝ地上の空に、僕等が二つの影を投げてゐたのをおぼえてゐる。

一九

返事を促して置いた劇場の友人から、一座のおもな一人には話して置いた、その他のことは僕の歸京後にしようと、漸く云つてよこした。これを吉彌に報告すると、かの女はきまりが悪いと云ふ。なぜかとよく／＼聞いて見ると、若しその一座に這入れるとしたら、數年前に東京で買はれたなじみが、その時とは違つて、その立派な立て女形になつてゐるといふことが分つた。よく／＼興ざめて來る藝者ではある。

それに、最も肝心な先輩の返事が全く面白くなかつた。女優に仕立てるには年が行き過ぎてゐるし、一度藝者をしたものには、到底、舞臺上の練習の困難に堪へる氣力がなからう。寧ろ斷然關係を斷つ方が僕の爲めだといふ忠告だ。僕の心の奥が絶えず語つてゐるところと寸分も違はない。

然し、僕も男だ、體面上、一度約束したことを破る氣はない。もう、人を頼まず、自分が自分でその場に全責任をしよふより外はない。

かうなると、自分に最も手近な家から探ぐつて行かなければならない。で、僕は妻に手紙を書き、家の物を質に入れて某の金子を調達せよと云つてやつた。質入れをすると云つても、僕自身は既に大抵行つてゐるのだから、目的は妻の衣服やその附屬品であるので、足りないところは僕の父の家へ行つて出して貰へと附け加へた。

妻はかうなるのを豫想してゐたらしい。實は、僕、吉彌のお袋が來た時、早手まはしであつたが、僕の東京住宅の近處にゐる友人に當て、金子の調達を頼んだことがある。無効であつた上に、友人は大抵のことを妻に注意した。妻は、また、之を全く知らないでゐたのは迂濶だと云はれるのが嫌さに、先づ以つて僕の父に内通し、その上、血眼になつてかけずりまはつてゐたかして、電車道を歩いてゐた時、子を抱いたまゝ、すんでのことで引き倒されかけた。

その上の男の子が、どこからか、「馬鹿々々しいわい」といふ言葉をおぼえて来て、その頃、頻りに

それを繰り返してゐたさうだが、妻は、それが今回のことの前兆であつたと、御幣ごへいをかついでゐた。それも尤もだといふのは、僕が東京を出發する以前に、漸く出版が出来た「デカダン論」の爲めに、僕の生活費の一部を供する英語教師の職をやめられかゝつてゐたのだ。

父からは嚴格ないまじめを書いてよこした。直ぐさま歸つて來いと云ふので、僕の最後の手紙はそれと行き違ひになつたと見え、今度は妻が、父と相談の上、本人で出て來た。

僕が、あたまが重いので、散歩でもしようと思つて出ると、向ふから、車の上に乳飲ちのみ兒ごを抱いて妻がやつて來た。顔の瘦せが目立つて、色が眞ッ青だ。僕は、これまでのことが一時に胸に浮んで、ぎよツとせざるを得なかつた。

「馬鹿ッ！——馬鹿野郎！」車を下りる妻の權幕は非常なものであつた。僕が妻からこんな下劣な侮辱の言を聽くのは、これが初めてであつた。

「……………」餘ッほどのぼせてゐるのだらうから、荒立あらかだてゝはよくないと思つて、僕はおだやかに二階へつれてあがつた。

茶を出しに來たおかみさんと妻は普通の挨拶はしたが、おかみさんは初めから何だか濟まないといふ様な顔つきをしてゐた。それが下りて行くと、妻はそとへも聽えるやうな甲高かんだかな聲で、なほ罵詈罵倒たがたがを絶たたなかつた。

「あなたは色氣狂ひになつたのですか？——性根しょうこんが抜けたんですか？——うちを忘れたんですか？

お父さんが大變おこつてらッしやるのを知らないんでせう？——」

「……………」僕は苦笑してゐる外なかつた。

「こんな兒があつても」と、かの女は抱き兒が泣き出したのをわざとほり出す様に僕の前に置き、

「可愛くなけりやア、捨てるなり、どうなりおしなさい！」

「……………」これまで自分の子を抱いたことのない僕だが、餘りおぎやア／＼泣いてるので手に取りあげては見たが、間が悪クツて、あやしたりすかしたりする氣になれなかつた。

「子どもは子どもだ、乳でも飲ましてやれ」と、無理に手渡しした。

「ほんとに、ほんとに、どんな悪魔がついたのだらう、人にかう心配ばかしさして」と、妻は僕の顔を睨にらむ權利でもあるやうに、睨み付けてゐる。

僕も、——今まで夢中になつてゐた女を實際通り悪く云ふのは、不見識であるかの様に思つたが、——それとなく分る様な言葉を以つて、首ッたけ惚れ込んでゐるのではないことを説明し、女優問題だけは僕の事業の手初めとして確かに甘うまく行く様に云つて、安心させようとした。妻はそれをも信じなかつた。

兎に角、妻は家、道具などを質入れする代りに、自分が人質に來たのだから、出来るつもりなら、

歸つて、僕自身で金を拵へて来いといふのである。で、僕は明日一先づ歸京することに定めた。

それにしても、今、吉彌を紹介して置く方が、僕のゐなくなつた跡で、妻の便利でもあらうと思つたから、——また一つには、吉彌の跡の行動を監視させて置くのに都合よからうと思つたから、——吉彌の進まないのを無理に玉をつけて、晩酌の時に呼んだ。料理は井筒屋から取つた。互ひに話はしても、妻は絶えず白眼を働かしてゐる。吉彌はまた續けて恥かしさうにしてゐる。仲に立つた僕は時に前者に、時に後者に、同情を寄せながら、三人の食事はすんだ。妻は不斷飲まない酒を二三杯傾けて赤くなつたので、焼酎酒だらうと冷かすと、東京出發前も、父の家でさう心配ばかりしないで、ちよつと酒でも飲めと云はれたのをしほに、初めて酒と云ふ物に酔つて見たと答へた。

僕は、妻を褥につけてから、また井筒屋へ行つて飲んだ。吉彌の心を確かめる爲め、また別れをする爲めであつた。十一時頃、歸りかけると、二階のおり口で、僕を捉へて云つた。

「東京へ歸ると、直ぐまた浮氣をするんだらう？」

「馬鹿ア云へ。お前の爲めに、随分腹を痛めてゐらア。」

「もツと痛めてやる、わ。」吉彌は僕の肩さきを力一杯につねつた。

妻のところへ歸ると、僕のつく息が夕方よりも一層酒くさい爲め、また新らしい小言を聴かされたが、僕があやまりを云つて、無事に済んだ。——然し、妻のからだは、その夜、半ば死人のやうに固く冷たい様な氣がした。

二〇

その翌日、吉彌が早くからやつて来て、そばを去らない。

「餘ほど恪氣深い女だよ」と、妻は僕に蔭口を云つたが、

「奥さん、奥さん」と云はれてゐれば、左程憎くもない様子だ。いろ／＼うち解けた話もしてゐれば、また二人一緒になつて、僕の悪口——妻のは鋭いが、吉彌のは弱い——を、僕の面前で云つてゐた。

「長くこゝへ來てゐるの？」

「いゝえ、去年の九月に。」

「はやるの？」

「えゝ、どこでもきいちやん／＼云つて呉れてよ。」

「さう」と、あざ笑つて、「はやりツ子だ、ねえ。——いくつ？」

「二十七。」僕はこれを聽いて、吉彌が割合に正直に出てゐると思つた。

「學校は這入つたの？」

「いゝえ。」

「新聞は讀めて？」

「假名をひろつて讀みます、わ。」

「それで役者になれるの？」

「そりやアどうだか分かりませんが、朋輩同志で舞臺へ出たことはあるのよ。」

二人はこんな問答もあつた。

僕は、歸京したら、ひよつとすると再び來ないで濟ませるかも知れないと思つたから、持つて來た書籍のうち、最も入用があるものだけを取り出して、風呂敷包みの手荷物を持へた。

遅くなるから、遅くなるからと、度々催促はされたが、何だか氣が進まないの、まアいゝ、まアいゝと時間を延ばし、——晝飯を過ぎ、——また晩飯を喫してから、——出發した。その日あたりからして、吉彌へ口のかゝつて來ることがなくなつて來たのだ。狭いところだから、直ぐ評判になつたのであらう。妻を海岸へ案内しようと思つたが、それも吉彌が引き受けたのでまかしてしまつた。

僕の東京の住家は芝區明船町だ。そこへ着いたのは夜の十時過ぎ——車を歸して、締つてゐる戸をたゝいてゐると、家の前を通り過ぎた人が一人あつて、それが跡もどりをして來て、

「義雄かい？」僕の父であつた。

「只今歸りました」と、僕はあわてゝ、少しきまりが悪く答へた。けふは歸つただらうと、それとな

く、わざ／＼見まはりに來たところなのだらうから、父も随分心配してゐるのかと、僕のからだに縮みあがつた。が、「まア、お這入んなさい」と、戸が明くのを待つて、僕は父を座敷へ通した。

妻が残して行つた二人の子供のいびきが、隣りの室から聽えてゐる。

僕が茶を命じたら、

「今、火を起しますから」と、妻の母は答へた。

「もう、茶は入りませんよ、お婆アさん」と云つて置いて、父は僕に對して頗る嚴格な態度になり、

「今度のことはどうしたと云ふんだ？」

「……………」僕は少し心を落ち着けてから、父の顔を見い／＼答へた、「このことは何にも聽いて下さんな、自分が苦しんで、自分で處分をつけるつもりですから。」

「さうか」と、父は僕の何にも云はない決心を見て取つたのだらう、「ぢやア、もう、けふは遅いから歸る。あす、早速うちまで來て貰ひたい。」

かう云つて、父は歸つて行つた。

妻が瘦せたのを聯想するせるか、父も瘦せてゐた様だし、今、相對する母もまた頬が落ちてゐる。

僕は家庭にパンを與へないで、自分ばかりが遊んでゐたやうに思へた。

僕の書齋兼寢室に這入ると、書棚に多く立ち並んでゐる金文字、銀文字の書冊が、一つ／＼にその

作者や主人公の姿になつて現はれて来て、入れ代り、立ち代り、僕を責めたりあざけつたり、讀めそやしたりする。その數のうちには、トルストイのやうな白髯の老翁も見えれば、メテルリンクのやうなハイカラの若紳士も出る。ヒュネカの如き活氣盛んな壯年者もあれば、ブラウニング夫人の如き才氣當るべからざる婦人もある。いづれも皆外國または内國の有名、無名の學者、詩人、議論家、創作家などである。そのいろんな人々が、また、その云ふところ、論ずるところの類似點を求めて、僕の交友間のあの人、この人になつて行く。僕は久し振りで廣い世間に出たかと思ふと、實際は暗闇の褥中にさめてゐるのであつた。持ち歸つた包みの中からは、嚴肅な顔つきでレオナドがのぞいてゐる。

神經の冴え方が久し振りに非常であるのをおぼえた。……ビスマクの首……グラドストンの首……曾て戀しかつた女共の首々……おやぢの首……憎い友人共の首……鬼女や瀧夜叉の首……こんな物が順ぐりに、あふ向けに寝て覺めてゐる室の周圍の鴨居のあたりをめぐつて、吐く息さへも苦しく又頼母しかつた時だ——「鬼よ、羅利よ、夜叉の首よ、われを夜伽の靈の影か……闇の盃盤闇を盛りて、われは底なき闇に沈む」と僕が新體詩で歌つたのは！

さまざまの考へがなほ取りとめもなく浮んで来て、僕といふものがどこかへ行つてしまつた様だ。その間にあつて、——毀譽褒貶は世の常だから覺悟の前だが、——かの「デカダン論」出版の爲めに、生活の一部を助けてゐる教師の職（僕は英語を一技術として教へてゐるのであつて、この技術を金で

買ふ様に思つてゐる現代學生には別に師事されるのを潔しとしない）を妻の聽いて來た通り、やめられるなら、早速また一苦勞がふえるといふ考へが、強く僕の心に刻まれた。

然し、その時はまたその時で、一層奮勵の筆を以つて、補ひをつけることが出來ると、覺悟した。すると、また、心の奥から、國府津に送る金はどうすると尋問し出す。これが最もさし迫つた任務である。然し、それも亦、僕には、殘忍なほど明確な決心があつた。

それが爲めに、然しわが家ながら、他家の如く窮屈に思はれ、夏の夜をうちは使ふ音さへ遠慮勝ちに、近頃のない寂しい徹宵の後に、ヤツと、待ち設けた眠りを貪つた。

二二

子供の起きるのは早い、翌朝、僕が顔を洗ふ頃には、もう、飯を済ましてゐた。

「お歸りなさい」とも、何とも云はないで、輕蔑の様子が見える様だ。口やかましいその母が、のぼせ返つて、僕の不始末をしやべるのをそばで聽いてゐたのだらうと思はれた。

僕が食膳に向ふと、子供はそばへ來て、ツツ立つたまゝ、姉の方が、

「學校は、もう、來月から始まるのよ」と云ふ。吉彌を今月中にといふ事件が忘れられない。弟の方はまた、

「お父さん、いちじくを取つてお呉れ」と云ふ。

いちじくと云はれたので、僕はまた國府津の二階住ひを冷かされた様に胸に堪へた。

「まだもう少し食べられないよ」と云つて、僕は携へて來た土産を分けてやつた。

妻の母は心配さうな顔をしてゐるが、僕のこと何にも尋ねないで、孫どもが僕の留守中にいたづらであつたことを語り、庭のいちじくが熟しかけたので、取りたがつて、見てゐないうちに木のぼりを初め、途中から落ッこちたことなどを云ッ附けた。子供は二人とも嫌な顔をした。

「お母さん、簞笥の鍵はどこにありますか？」僕はよく残酷な決心の實行に取りかゝつた。

「知りませんよ」と、母は曖昧な返事をした。

「知らない筈はない。おれの家をあづかつてゐながらどんな鍵でもそんざいにして置く筈はない。」

「實は大事にしまつてあることはしまつてありますが、お千代が渡してくるなと云つてゐましたから——」

「千代は私の家内です、そんな云ひ分は立ちません。」

「それでは出しますから」と、母は鍵を持つて來て、そッけなく僕の前に置き、臺どころの方へ行つてしまつた。

僕は簞笥の前に行き、一々その引き出しを明け、おもな衣類を出して見た。大抵は妻の物である。

紋羽二重や鼠縮緬の衣物、——繻珍の丸帯に、博多と繻子との晝夜帯、——黒縮緬の羽織に、寶石入りの帶止め——長濱へ行つた時買ったまゝ、しごきになつてゐる白縮緬や、裏つき水色縮緬の裾よけ、などがある。妻の他所行き姿が目の前に浮ぶ。そして昔の懐しいかをりまでが僕の鼻をつく。

「行つて來ますよ」といふ外出の時の聲と姿とは、妻の年取るに従つて、段々引き締つて威嚴を生じて來たのを思ひ出させた。

まだ長襦袢がある。——大阪の或藝者——中年増であつた——がその色男を尋ねて上京し、行くへが分らないので、暫く僕の家にもた後、男のゐどころが分つたので、おもちゃの様な一家を構へたが、つれ添ひの病氣の爲め収入の道が絶え、窮したあげくに、この襦袢を僕の家を以つて質入れした。その後、二人とも行く方が知れなくなり、流すのは惜しいと云ふので、僕が妻の爲めにこれを出してやつた。少し派手だが、妻はそれを着て不斷の沈み勝ちが直つた様に見えたこともある。

それに、まだ一つ、ズツと派手な襦袢がある。これは、僕等と一緒に初めに買つてやつた物だ。僕より年上の妻は、その時からじみな作りを好んでゐたので、僕がわざ／＼若作りにさせる爲め、買つてやつたのだ。今では不用物だから、子供の大きくなるまでと云つてしまひ込んであるが、その色は今も變らないで、燃える様な緋縮緬には、妻のもとの若肌のにほひがする様なので、僕はこッそりそれを嗅いで見た。

「今の妻と吉彌とはどちらがいゝ？」と云ふ聲が聽える様だ。

「無論、吉彌だ」と、云ひ切りたいのだが、心の奥に誰れか耳をそば立てゝゐるものがある様な氣がして、さう思ふことさへ憚はづかられた。

兎に角、多少の價ねうちがありさうな物はすべて一包みにして、僕はやとひ車に乗つた。質屋をさして車を驅けらしたのである。

友人にでも出會つたら大變と、親しみのある東京の往來を、疎うとく、氣恥かしい様に進みながら、僕は十數年來つれ添つて來た女房を賣りに行くのではないかといふ感じがあつた。

僕は再び國府津へ行かないで——若し行つたら、ひよつとすると、旅の者が土地を荒したなど云ひふらされて、袋たたきに逢はされまいものでもないから——金子だけを送つてやることに初めから心には定きめてゐたので、直ぐ吉彌宛で電報がはせをふり出した。

二三

國府津では、僕の推察通り、僕に對する反動が起つた。

さすがは學校の先生だけあつて、隣りに藝者がゐても寄りつきもしない、なか／＼堅い人であるといふのが、僕に對する最初の評判であつたさうだ。が、段々僕の私行しかうがあらはれて來るに従つて、吉

彌の兩親と會見した、僕の妻が身受けの手傳ひにやつて來たなど、あること無いことを、狭い土地だから、直きに云ひふらした。

それに、吉彌が馬鹿だから、のろけ半分に出たことでもあらう、女優になつて僕に貢ぐのだと語つたのが、土地の人々の邪推を引き起し、僕はかの女を使つて土地の人々の金をしぼり取つたといふ様に思はれた。それには、青木と田島とが、失望の恨みから、事件を誇張したり、捏造ねつぞうしたりしたのだらう、僕が機敏に逃げたのなら、僕を呼び寄せた坊主をなぐれといふ騒ぎになつた。僕の妻も危険であつたのだが、はじめは何も知らなかつたらしい。吉彌を案内として、方々を見物などしてまはつた。僕が出發した翌日の晩、青木が井筒屋の二階へあがつて、吉彌に、過日與へた小判こばんの取り返し談判をした。

「男が一旦やらうと云つたもんだ！」

「わけなくやつたのではない！」

「さん／＼人をおもちやにしやアがつて——貰つた物ア返しやアしない！」

「何だ、この薄情女め！」

無理に奪ひ取らうとする、取られまいとする。追ツかけられて、二階の段を下り、化粧部屋の口で、とツつかまると、男は女の帶の間へ手をつツ込む。さうさせまいと悶もたいても女の力及ばずと見たのだ

らう、

「ぢやア、やるから待ちやアがれ！」身づから帯の間から古い黄金を取り出し、「えゝツ、拾つて行きやアがれ」と、ほうりつけ、「畜生、そんな物ア手にさはるのも穢れらア！」

僕の妻は丁度井筒屋へ行つてゐたので、この芝居を、爐のそばで、家族と一緒に見たと云ふ。

「もう、二度とこんな家へ来やせんぞ」と、青木は投げられた物を取り、吉彌をにらんで歸つて行つた。

「泥棒ぢぢい！」

吉彌は、片足を一步踏み出すと同時に、あごをも餘ほど憎らしさうに突き出して、くやしがつた。その様子が大變をかしかつたので、一同は云ひ合はせた様に吹き出した。かの女もそれに釣り込まれて、笑顔を向け、爐のそばに来て座を取つた。

薬罐のくらく煮立つてゐるのが、吉彌のむしやくしやくしてゐるらしい胸の中をすツかり譬へてるやうに、僕の妻には見えた。

大きな臺どころに大きな爐——くべた焚木は燃えてゐても、風通しのいゝので、暑さはおぼえさせなかつた。

「けちな野郎だ、なア？」お貞は斯う云つて、吉彌を慰めた。

「横つらへ投げつけてやつたらよかつたのに」と、正ちゃんも吉彌の肩を持つた。

「きいちゃんの様子ツたら、なかつた」と、お君が云つたので、一同はまた吹き出した。

「どうせ、あたいが馬鹿なんですから、ね」と、吉彌は横を向いた。

「一體どうしたわけなの？」僕の妻は仲裁的に口を出した。

「呉れたもんを取り返しに来たの。」

「あまりだますから、おこつたんだらう？」

「だまされるもんが悪いのよ。」

「さう？」妻は自分の夫もだまされてゐるのだと思つてきまりが悪くなつたが、直ぐ氣を變へて、冷

かし半分に、「可哀さうに、貰つたと思つたら、おほ損をした、わ、ね。」

「ほんとに」と、吉彌も笑つて、「指輪に拵へてやらうと思つてたら、取り返されてしまつた。」

かういふ話をしてゐるうち、吉彌のお袋が一人の女をつれてやつて來た。吉彌は僕の方も亦出來なくなるかと疑つて、淺草へ電報を打つたので、今度はお袋が獨りでやつて來たのだ。つれた女は藝者の候補者だ。

お君が一座の人々をぎろく見くらべてゐるところで、お袋はお貞と吉彌とから事情を聴き、また僕の妻にも紹介された。妻も亦お袋にその思つたことや、將來の吉彌に對する注文やを述べたり、聴

き糺ただしたりした。期せずして眞面目な、堅苦しい會合となつた。お袋は不安の状態を愛想笑ひに隠してゐた。

その間に、吉彌はどこかへ出て行つた。あちらこちらで借り倒してある借金を拂ひに行つたのである。

主人がその代りに會合に加つて、

「もう、何とか返事がありさうなものです——」

「さうです、ねえ」と、僕の妻は最終の責任を感じて、異境の空に獨りぼつちの寂しさをおぼえた。

僕は、出發の當時、井筒屋の主人に、直ぐ、僕が出直して來なければ、電報で送金すると云つて置いたのだ。

先刻から、正ちゃんもゐなくなつてゐたが、それがうちへ駆けつけて來て、

「きいちゃんが、今、方々の拂ひをしてをる」と、注進した。

「ぢやア、電報がはせで來たんでせう？」と、僕の妻は思はず叫んだ。

「そりやア、いかん、呼んで來ねば」と、主人は正ちゃんをつれて大いそぎで出て行き、やがて吉彌を呼び返して來た。

「かはせが來たんですか？」と、妻はおこつた様子。

「え、」と、吉彌はしよげてゐた。

「ぢやア、さう云つて呉れないぢやア困ります、わ。」

「出してお見」と、主人が仲はに這入ひつて調べて見ると、もう、二三十圓は拂ひに使つてあつた。僕が直接に送つたのが失敗なのだ。

それから、妻と主人とお袋とで詳しい勘定をして、僕の宿料やら、井筒屋へ渡す分やらを取つて行くと、吉彌のだらしく使つたその借金ぐらゐはなほ拂へるほど残つた。然し、それも僕のうちなき屋なぞへ拂ふ分にまはつた。

「お客さんの分まで拂ふのア馬鹿々々しい、わ」と、吉彌は自分の金でも取り扱ふ様なつもりでゐた。

僕の妻は、そんなわけの物ではないといふことを——どんな理由でだか、そこまでは僕に報告しなかつたが——説き聽かせ、お袋に談判して、吉彌のその借金だけはお袋が引き受けることにして、直ぐ淺草へ取り寄せの電報を打たせた。

二三

その晩、僕の妻のところへ、井筒屋から御馳走を送つて來たし、またお袋と吉彌と新藝者とが遊びに來た。

「あなたはどこにお勤めでしたの？」とは、お袋が異様な問ひであつた。
 「わたしはそんな苦勞人ぢやア御座いませんよ」と、僕の妻は顔を赤くして笑つた。「そりやア、これまでも今度の様なことがあつたし、またいろんな藝者をつれ込んで來られたこともあつたから、その方では随分苦勞人になつた、わ。」

「ほんとです、ねえ、私も若い時は随分そんな苦勞を爲せられましたよ。今では、又、子供の爲めに苦勞——世間では、娘を藝者にして、親は左うちでは行けると申しますが、こんな働きのない子ばかりでは、どうして、どうして、却つて苦勞は絶えません。」

かういふ話しがあつてから、吉彌とお袋とは歸つた。まだ青木から餞別でも貰はうといふ未練があつたので、渠を呼び出しに行つたのだが、渠は逃げてゐて、會へずじまつたらしい。

妻は跡に残つた新藝者——色は白いが、お多福——からその可哀さうな身の上ばなしを聞き、吉彌に對する憎みの反動として、その哀れな境遇に同情を寄せた。東京からわざわざやつて來て、主人には氣に入りさうな様子が見えないのであつた。

この女から妻は吉彌の家の状態をも聞き、僕の推知してゐた通り、吉彌の歸るのを待つてゐる男（それが區役所先生の野澤だ）があつて、今度もそれが拵へてやつた新調の衣物を一揃へお袋が持つて來たといふことまで分つた。引かされるのを披露にまはる時の用意になるのであつたらう。

「田村さんの奥さんに會ひたい」といふ人が、突然やつて來た。それが例の住職だ。

かうく、かういふ事情になつてゐるところを、僕が逃げたといふので、その代りに住職に復讐しようとして、町の俠客連が二三名動き出したのを、人に頼んで、漸く推し靜めて貰つたが、

「いつ、どんな危険が奥さんにも及ぶか分かりませんから、今晚急いで歸京する方がよろしからう」との忠告だ。

僕の妻は子をいだいて青くなつた。

吉彌のお袋の出した電報の返事が來たら、三人一緒に歸京する約束であつたが、さうも出來ないで、妻は吉彌の求めるまゝに少しばかりの小遣ひを貸し與へ、荷物の方づけもそこそこにして、僕の革靴は二人に託し、井筒屋の主人と住職とにステーションまで送られて、その夜東京へ歸つて來た。

「憎いのは吉彌、馬鹿者はあなた、可哀さうなのは代りに行つた藝者だ」と、妻は泣いて僕に語つた。その翌日から、妻は年中堪へに堪へてゐたヒステリが出て、病床の人となつた。乳飲み兒はその母の乳が飲めなくなつた。その上、僕等二人の留守中に、老母がその孫どもに食べ過ぎさせたので、それも亦不活潑に寝たり、起きたりすることになつた。

僕の家は、病人と瘦ツこけの住ひに變じ、赤ん坊が時々熱苦しくもぎやア泣くほかは、お互ひに口を聴くこともなく、夏の眞晝はひツそりして、なまぬるい薬のほひと陰鬱な空氣とのうちに、

僕自身の汗じみた苦悶のかげがそっくり湛^{たまよ}つてゐる様だ。かうなると、浮薄な吉彌のことなどは全く厭^{いや}になつてしまつた。

僕は獨り机に向ひ、最も不愉快な思ひがして、そゞろ慚愧の情に咽^{むせ}びさうになつたが、全くこの始末をつけてしまふまでは、友人をも訪^{たづ}はず、父の家にも行くまいと決心した。

全く放棄されたこの家はたゞ僕一人の奮勵如何にあるのだが、第一に胸に浮ぶ問題は、

「この月末をどうしよう？」

而もそれがこの二三日に迫つてゐるのだ。

二四

あわてたところで、駄目な物は駄目だから、先づ書きかけた原稿を終つてしまはうと、メレヅコウスキの小説縮寫をつづけた。

レオナドの生涯は實に高潔にして、悲惨である。語らぬ戀の力が老死に至るまで一貫してゐるのは云はずもあれ、渠を師とするものうちには、師の發展のはか／＼しくないのでをまどろっこしく思つて、その對抗者の方へ裏切りしたのもあれば、また、師の人物が大き過ぎて、悪魔か聖者か分らない爲め、迷^{まよ}ひに迷つて縊^い死したのもある。また、師の發明工風中の空中飛行機を——まだ乗つてはいけ

ないとの師の注意に反して——熱心の餘り乗り試み、墜落負傷して一生の片輪になつたのもある。そしてレオナドその人は國籍もなく一定の住所もなく、きのふは味方、けふは敵國の爲め、たゞ勞働神聖の主義を以つて、その科學的な多能多才の應ずるところ、築城、建築、設計、發明、彫刻、繪畫など——殊に繪畫は渠をして後世永久の名を残さしめた物だが、殆ど凡て未成品だ——を平氣で、あせることなくやつてゐる間に、後進または弟子であつて、又對抗者なるミケランジェロやラファエルなどに壓倒されてしまつた。

僕はその大エネルギーと絶對忍耐力とを身にしみ込むほど羨ましく思つたが、死に至るまで古典的な態度を以つて安心してゐたのを物足り^{ものた}ない様に思つた。デカダン^{デカダン}は寧ろ不安を不安のまゝに出發するのだ。

こんな理窟^{りく}ッばい考へを浮べながら筆を走らせてゐると、どこか高いところから、

「自分が耽溺^{だん}してゐるからだ」と、呼號するものがある様だ。またどこか深いところから「耽溺^{だん}が生命だ」と、呻吟する聲がある。

いづれにしても、僕の耽溺した状態から遊離^{いぢり}した心が理窟^{りく}を捏^{こね}るに過ぎないのであつて、僕自身の現在の窮境と神經過敏とは、生命のある限り、どこまでもつき纏つて來るかの様に痛ましく思はれた。

筆を改めた二日目に原稿を書き終つて、之を某雜誌社へ郵送した。書き出しの時の考へに従ひ、理

窟は何も云はないで、たゞ紹介だけにとゞめたのだ。これが今月末の入費の一部になるのであつた。その夕がた、もう、吉彌も歸つてゐるだらうと思ひ、現に必要な物を入れてある革靴を淺草へ取りに行つた。一つは、かの女の様子を探るつもりであつた。

雷かみなりもんで電車を下り、公園を抜けて、千束町、十二階の裏手に當る近所を、云はれてゐた通りに探すと、渡瀬といふ家があつたが、まさか、そこではなからうと思つて通り過ぎた。二階長屋の一隅で、狭い、古い、きたない、羅宇ろをや烟管きぼろの住ひさうなところであつた。かのお袋が自慢の年中絹物を着てゐるものゝ住所とは思へなかつた。然し、ほかには渡瀬といふ家がなさうだから、跡戻りあともとどをして、その前をうろついてゐると、——實は、氣が臆おそして這入りはひにくかつたのだ——

「おや、先生」と、吉彌が入り口の板の間まで出て來た。大きな丸鬚すがたになつてゐる。

「……………」僕は敷居をまたいでから、無言で立つてゐると、

「まア、おあがんなさいな」と云ふ。

見れば、もとは店さきでもあつたらしい薄ぐらい八疊の間の右の片隅かたすみに僕の革靴が置いてある。之に反對した方の壁ぎはは、少し低い板の間になつておやぢの仕事場らしい。下駄の出來かけ、桐の用材などがうツちやり放しになつてゐる。八疊の奥は障子なしに直ぐ居間であつて、そこには、ちやぶ臺を据ゑて、そのそばに年の割合ひにはあたまの禿げ過ぎた男と、でッぷり太つた四十前後の女とが、

酒をすませて、御飯を喰つてゐる。禿げあたまは長火鉢の向ふに坐つて、旦那振つてゐるのを見ると、例の野澤らしい。

僕はその室にあがつて、誰れにもと即つがず一禮すると、女の方は丁寧ていねいに挨拶したが、男の方は氣がついたのか、つかないのか、飯にかこつけて僕を見ない様にしてゐる。

吉彌はその男と火鉢をさし挟んで相對し、それも、何だか調子抜けのした様子。

「まア、御飯をお濟しなさい。」かう、僕が所在しよざいなさきに勧めると、

「もう、すんだの」と、吉彌はにっこりした。

「おツ母さんは？」

「赤坂へ行つて、ゐないの。」

「いつ歸りました？」

「きのふ。」

「僕の革靴なげんを持つて來て呉れたか、ね？」これはわざと聽いたのだ。

「あすこにある、わ」と、指さした。

「あれが入り用だから、取りに來ました。」

「さう？」吉彌は無關係なやうに長い煙管をはいた。

こんな話しをしてゐるうちに、跡の二人は食事を済ませ、家根屋の持つて来る様な梯子を傳つて、二階へあがつた。相撲取りの様に腹のつき出た婆アヤが来て、「菊ちゃん、もう済んだの？」と云つて、お膳をかたづけした。如何にも、もう吉彌ではなく、本名は菊子であつた。かの女は男の立つた跡へ直り、煙管でおのれの跡をさし示めし、

「こつちへお出」といふ御命令だ。

僕はおとなしくその通りに住まつた。

二階では、例の花を引いてゐる様子だ。

「あれだらう？」僕がかう聴くと、

「さうよ」と、菊子が嬉しがつた。

馬鹿な奴だとは思つたが、僕はもう未練がないと云ひたい位だから、物好き半分に根問ひをして見た。二階にはおやぢもあるし、他にまだ二人ばかりゐる。跡からあがつた（それも晝頃から来てゐたといふ）女は、浅草公園の待合〇〇の女將であつた。

菊子の口のはたの爛れはすっかり直つた様だが、その代りに眼病の方がひどくなつてゐる。勤めをしてゐる時は、氣の張りがあつたのでまだしも病毒を押さへてゐられたが、張りが抜けたと同時に、

急にそれが出て來たのだらう。井筒屋のお貞が云つた通り、果して梅毒患者であつたかと思ふと、僕は身の毛が逆立つたのである。井上眼科病院で診察して貰つたら、一二箇月入院して見なければ、直るか直らないかを判定しにくいと云つたとか。

かの女は黒い眼鏡を填めた。

僕は女優問題に就ては何も云はなかつた。

十二三歳の女の子がそこから歸つて来て、

「姉さん、駄賃お呉れ」と、火鉢のそばに足を投げ出した。顔の厭に平べつたい、前齒の二三本缺けた、鳥渡見ても、愛想が盡きる子だ。菊子が青森の人に生んで、妹にしてあると云つたのは、乃ち、これらしい。話しばかりに聽いて想像してゐたのと違つて、僕が最初からこの子を見てゐたなら、ひよつとすると、この子を子役または、花役者に仕上げてやりたいなどいふ望みは起らなかつたばかりか、吉彌に對しても亦全く女優問題は出なかつたかも知れない。今一人、實の妹を見たかつたのであるが、公園藝者になつてゐるから、そこにはゐなかつた。

「先生がいらつしやるぢやないか？ ちゃんとお坐り。」かう菊子が云つたので、子は澁々坐り直した。

「けいちゃん、お前、役者になるかい？」

「あたゝい、役者なんか厭だア」と、けいちゃんと云ふのがからだを揺すつた。
 僕は菊子とその子をも女優にならせるといふ約束をこの通り返り見ないでも、それを責める勇氣はなかつた。

二五

「さア、やるから遊んでお出」と、菊子は二錢銅貨をほうり出すと、けいちゃんはそれを拾つて出て行つた。

菊子も僕を置いて二階へあがつた。

二階では、――

「さア、絶體だ。」

「出る、出る！」

「助平だ、ねえ――？」

「降りてやらア。」

「行けばいゝのに――赤だよ。」

「そりや来た！」

「こん畜生！」

ぺた／＼と花を引く音がしてゐる。

菊子がまだ國府津にゐた時、僕をよろこばせようとして、

「歸つたら、うちの二階が明いてるから、隔日かくじつに来て、あすこで、勉強なさいよ」と云つた。その二階がいつもあの様さまなのだらう。見す／＼墮落の淵に落し入れられるのであつた。未練がないだけ、僕は今却つて仕合せだと思つたが、また、別なところで、渠等の知らないうちにあゝいふ社會に這入つて、あゝいふ惡風に染そみ、あゝいふ楽しみもして、あゝいふ耽溺のにはひも嗅かいで見たい様な氣がした。僕は掃き溜めをあさる瘦せ犬の様に、鼻さきが鋭敏になつて、飽くまで耽溺の目的物を追つてゐたのである。

やがて菊子が下りて来て、

「お父ちちさんはお花に夢中よ」と云ふ。まだ多少はしほらしいところがあつて、ちよつと顔を出せとでも云つて来たものらしい。會ひたくないと云つたのだらう。僕は、かのうなぎ屋で、おやぢが「こんなところでお花でもやれば」と云つたのは、僕をその方へ引き込まうとして、僕の氣を引いて見たのだらうと思ひ出された。

「なアに、どうせ僕は花はしないから――」

お袋はゐないし、おやぢは僕を避けてゐる。婆アやも狭い臺どころへ行つて見えない。一昔も過ぎたかの様に思はれる國府津のことが一時に僕の胸に込みあがつて来て、僕は無言の恨みをたゞ眼のらみに集めたらしい。

「あのこはい顔！」菊子は眞面目にからだを疎ませたが、病んでゐる目がこちらを見つめて、やにッぽくしよぼついてゐた。が、僕にもそのしよぼ付きが移つておのづから目ばたきをした時、かの女は絳絹の切れを出して自分で自分の兩眼のやにを拭いた。

お袋がいづれ挨拶に来るといふので、僕はそのまま、辻車を呼んで貰ひ、革靴を乗せて、そこを出る時、「少しお小遣ひを置いてツて頂戴な」と云ふので、僕は一圓札があつたのを渡した。

「二度と再び来るもんか？」かう、僕の心が胸の中で叫んだ。

僕が荷物を持つて歸つたのを見て、妻は褥の中から頻りに吉彌の様子を聴きたがつたが、僕は之を説明するのも不愉快であつた。

「あの位にしてやつたんだから、義理にもお袋が一度は来るでせう——？」

「さうだらうよ。」僕はいゝ加減な返事をした。

「吉彌だツてさうでさア、ね、小遣ひを立てかへてあるし、髻だツて、早速鬘に結ふのに無いと云ふので、借してあるから、持つて来る筈だ、わ。」

「目くらになつちやア來られない、さ。」

僕の返事は煮え切らなかつたが、妻の熱心は「目くら」の一言に飛び立つ様からだを向き直し、「えッ！ もう、出たの？」と、問ひ返した。

吉彌の病氣はさうひどくないにしても、罰當り、業さらしといふ敵愾心は、妻も僕も同じことであつた。然し、向ふが微毒なら、こちらはヒステリー——僕は、どちらを向いても、自分の耽溺の記念に接してゐるのだ。どこまで沈んで行くつもりだらう？

「まだ耽溺が足りない。」これは、僕の焼けッ腹が叫ぶ聲であつた。

革靴をあけて、中の書物や書きかけの原稿などを調べながら、つくづく思ふと、この夏中の仕事は——いろんな考へを持つて行つたのだが——たゞレオナドの紹介ばかりが出来たに過ぎない。それも、今月中の喰ひ物の一つになつてしまふのだ。最も多望であつた脚本創作のことなどは、殆ど全く手がつかなかつたと云つてもいい。

學校の方は一同僚の取り爲しで甘く納まつたといふ報告に接したが、質物の取り返しにはこゝ暫く原稿を大車輪になつて働かなければならない。

僕は自分の腕をさすつて見たが、何だか自分の物でない様であつた。

その後、四五十日間は、學校へ行つて不愉快な教授を爲すほか、どこへも出ず、机に向つて、思索と創作とに努めた。

愉快な問題にも、不愉快な疑問にも、僕は僕そっくりがびつたり當て填る氣がして、天上の果てから地の底まで、明暗を通じて僕の神經が流動瀾漫してゐる様だ。すること、爲すことが夢か、まぼろしの様に軽くはかどつた。その癖、得たところと云つては、數篇の短曲と短い小説二三篇とである。金にしては何ほどにもならないが、創作としては、よしんば望んでゐた脚本が出来たとしても、その脚本よりかすつと傑作だらうといふ確信が出た。

僕のからだは、土用休み早々、國府津へ逃げて行つた時と同じ様に衰弱して、考へが少しもまとまらなくなつた。そして、僕が殘酷なほど減多に妻子と家とを思ひ浮べないのは、その實、それが思ひ浮べられない程に深く僕の心に喰ひ込んでゐるからだといふ氣がした。

「えゝッ、少し遊んで、やれ！」

かう決心して、僕はなけなしの財布を懷に、相變らず陰鬱な、不愉快な家を出た。否、家を出たといふよりも、今の僕には、家をしよつて歩き出したのだ。

虎の門そこから電車に乗つたのだが、半ば無意識的に淺草公園へ來た。

池のほとりをぶらついて、十二階を見ると、吉彌乃ち菊子の家が思ひ出された。誰れかそのうちの者に出會すだらうかも知れないと、あたりに注意して歩いた。僕はいつも考へ込んでゐるので、外へ出ても、こんなにそはくしい歩き方をするのは減多にないのだ。

菊子はとう／＼僕の家へ來なかつた。お袋も亦さうであつた。ひよつとすると、菊子の目が全くつぶれたのではないか知らん？ 或はまた野澤も、金がなくなつた爲め、足が遠のいてゐはしないか？ また、かの女は二度、三度、四度目の勤めに出てはゐないか？

かう云ふことを思ひ浮べながら、玉乗りのあつた前を通つてゐると、吾妻橋の近處に住んでゐる友人に會つた。

「どこへ行くんだ？」

「散歩だ。」

「遠いところまで來たもんだ、な。」

「なアに、意味もなく來たんだ。」

「どツかで飲まう」といふことになり、つれ立つて、奥の常磐へあがつた。

友人もうす／＼聽いてゐたのか、そこで夏中の事件を問ひ糺すので、僕は或程度まで實際のところ

を述べた。それから、吉原へ行かうといふ友人の發議に、僕もむしゃくしゃ腹を癒すにはよからうと思つて、賛成し、二人はその道を北に向つて車で驅けらした。

翌朝になつて、僕も金がなければ、友人も僅しか持つてゐない。止むを得ず、僕がゐることつて、友人が當てのあるところへ行つて取つて來た。

「滑稽だ、ねえ？」

「實に滑稽だ。」

二人は目を見合はせて吹き出した。大門を出てから、或安料理店で朝酒を飲み、それから向島の百花園へ行かうと云ふことに定つたが、僕は千束町へ寄つて見たくなつたので、先づ、その方へまはることにした。

僕は友人を連れて復讐に出かける様な意氣込みになつた。もつとも、酒の勢ひが助けたのだ。朝の八時近くであつたから、まだ菊子のお袋もゐた。

「先生、濟まない御無沙汰をしてゐまして——一度あがるつもりですが」と、挨拶をするお袋の言葉などには、僕はもう頓着しなかつた。

「菊ちやんの病氣はどうです？」僕は敵の本陣に切り込んだつもりだ。

「あの通り、段々悪くなつて來まして、ねえ」と、お袋は實際心配さうな様子で、「入院しなけりやア

直らないさうですが、それにやア毎月小百圓は入りますから——」

「野澤さんに出してお貰ひなさいな」と、僕は菊子に冷かし笑ひを向けた。

「さう甘くも行きません、わ。」かの女も笑つて眼鏡を片手で押さへた。

その様子が可哀さうにもならないではないが、僕は友人と共に、出て來た菓子を喰ひながら、誇りがほに、昨夜から今朝にかけての滑稽の居残り事件をうち明けた。禮を踏まない渡瀬一家のことは、もう、忘れてゐるといふことをそれとなく知らせたかつたのだ。すると、お袋が、それを悟つたか、悟らなかつたか、

「もう、先生、居残りは困ります、ねえ。私共も國府津で困りましたよ。先生はいらツしやらない、奥さんはお歸りになつた、これと私とでどんなにやきもきしたか知れやアしません、わ。」

「然し、まア、無事に濟んだから結構です」と、僕は飽くまで冷淡だ。

「どうして、先生、私の方は無事どころぢやア御座いませぬの。あれからと云ふものは、毎日々々、この子の眼病の話で、心配は絶えやアしませんよ。」まだ僕の同情を買はうとしてゐるらしい。

「いゝ氣味だ！」僕の心は、然し、かう云つてよろこんだが、考へて見ると、僕の家には、妻も亦重い病氣にかゝつてゐるのだ。菊子の病氣を冷笑する心は、やがて又僕の妻のそれを嘲弄する心になつた。僕の胸があまり荒んでゐて、——僕自身もあんまり疲れてゐるので、——單純な精神上のまよは

しや、たわいもない言語上のよろこばせやで満足が出来ない、——同情などは薬にしたくも根が絶えてしまった。

僕は妻のヒステリを以つて菊子の毒眼を買ひ、兩方の病氣を以つてまた僕自身の衰弱を土培つた様なものだ。失敗、疲勞、痛恨——僕一生の努力も、心になぐさめを得ないから、古寺の無縁塚をあげく様であらう。たゞその朽ちて行くにほひが生命だ。

かう思ふと、僕の生涯が夢うつゝの様に目前にちらついて来て、そのつかまへどころのない姿が、而もひた／＼と、僕なる物に浸り行く様になつた。そして、形あるものはすべて僕の身に縁がない様だ。

僕の目の前には、僕その物の幻影よりほか浮んでゐない。

「さア、行かう」と、友人は僕を促した。

「これから百花園に行くんです」と、僕も立ちあがつた。

「冷淡！ 残酷！」かう云ふ無言の聲が僕のあたまに聴えたが、僕はひそかに之を辯解した。若し不愉快でも妻子のほひがなほ僕の胸底にしみ込んでゐるなら、厭な菊子のほひも亦永久に僕の心を離れまい。この後とても、幾多の女に接し、幾度かそれから來たる苦しい味をあぢはふだらうが、僕は、その爲めに窮屈な、型にはまつた墓を掘ることが出来ない。冷淡だか、残酷だか知れないが、衰

弱した神経には過敏な注射が必要だ。僕の追窮するのは即座に効驗ある注射液だ。酒の如く、アブサントの如く、そのほひの強い間が最もきゝめがある。そして、それが自然に壓迫して來るのが僕等の戀だ。あこがれだ。

かう云ふことを考へてゐると、いつの間にかあがり口をおりてゐた。

「どうか奥さんよろしく」と、お袋は云つた。

菊子は、さすが、身の不自由を感じたのであらう、寂しい笑ひを僕等に見せて、なごり惜しさうに、「先生、私も目がよけりやアお供致しますのに——」

僕はそれには答へないで、友人と共に、

「左様なら」を凱歌の如く思つて、そこを引きあげた。

篠
原
先
生

「あの先生も、奥さんと娘さんとを無くしてから、がらり人柄がお變りになつた」と云はれてゐる。芝の區會議員篠原勇は、實に世間のうはさ通り、この頃では、人間が一變した。

昔から四國町に住んでゐて、薩摩ッ原を開いたことには、この人の盡力が大いに與つてゐる。渠はその爲めに可なり広い地面と家屋とを自分の名義にすることが出来て、そこに私立の小學校を建て、みた。また、夜學を設けて、多くの徒弟を養つた。教師は渠と渠の細君と一人の傭ひ女教師とであつたが、渠の教へを受けたものが方々の商店の主人やおかみさんになるに従つて、篠原先生といふ一つの勢力が三田界限に出来て、町内の相談事の持ち込みどころとなつた。

私立の小學校が餘り勢力がなくなつた頃から、その方は専ら上の娘の高等女學校を出たのにまかせツ切りで、細君は公立小學校の準教員に出で、篠原自身は〇〇中學の國語漢文教師を勤めてゐた。然し生徒間からは篠原は法螺吹きだといふ不人望を被むり、そこをよす様になつてから、渠が國で有する田地の開拓に身を入れるつもりになり、細君を辭職させて田舎の方の監督に送つた。その頃から篠原は芝の區會議員になつてゐたが、元來が野心家だけに、次回の代議士選舉には、候補者として國から打つて出る準備の爲め、細君に云ひふくめ、田舎の有名な舊家を標榜して、多少の地盤を固めさせてゐた。

渠は少壯の時改進黨の一有力者であつた。そして、それが爲めに多くの財産も倒盡して、長らく教師などをやつてゐた。それも渠の常套手段であつて、古い教育家の名譽と養成した子分の勢力とを借りて、他日の發展を待つてゐたのだ。

「今度當選したら、多年の鬱憤も十分に晴らしてやらうし、自分が倒盡した先祖の財産も一躍して取り返して見せる」とは、篠原が細君に誓つたところだ。細君もその意を受けて熱心に金錢のかゝらぬ運動の準備を怠らなかつたが、ふと病氣にかゝつて、死んでしまつた。すると、母ばかりが手頼りであつた姉嬢も、がツかりしたのか、直ぐその跡を追つた。僅か一週間に葬式が二つあつたわけで、世間に對しては、餘程超然主義にかまへてゐた篠原も、これには非常な失望をしたらしい。その後の渠は圓活な超然性が眞の冷淡に變じ、人から見ると、その金錢慾が露骨に現はれるやうになつた。

先づ校舎に使つてゐた裏の建物を二軒の借家に造り上げ、表の方も、下の食堂と二階の客間と子供の勉強室とを残して、左右を二個の商店向きの借家に拵へ直し、一方には菓子屋、一方には道具屋が住むことになつた。眞ん中には篠原勇の表札はかゝつてゐても、久し振りで訪ねて來る人には、こゝがさうか知らんと鳥渡まごつかれる。その癖、渠の奇癖はなほ世間慾の淡然たるを表しようとして、自分等の三室をも立ち退き、裏口へ立派な石の門でも建て、奥の臺どころ四疊半ばかりあるのを造り變へ、そこへ引ツ込んで、そこを自炊場、寢室、兼客間にして、世人を驚かさうと考へてゐる。

「あなたも變りました、ねえ——奥さんを改めてお貰ひになつた方がよう御座いますよ」と、はじめて無遠慮に切り込んだのは、篠原が元から知つてゐる待合のおかみで、渠が昔その待合で拵へた借金の催促に來た時であつた。篠原は、この頃、獨りで寂しく感ずる時など、その婆アさんのところへ出て行き、その婆アさんのお酌で昔話を肴に酔つて來るのが一つの樂みになつてゐた。ところが、昔の借金の催促に來るとは少し異様だと思つて、うす氣味悪い調子であり合せの馳走を出し、互ひにさし向ひの酔ひが出て來るまゝ、渠はいつもの冷かし口調を以つてあしらつてゐると、催促とは表面の口實で、その裏には、近來不景氣勝ちであつて、女の腕ばかりではとても待合の商賣をつゞけて行くことが出來ないから、一緒になつて少し資本をつぎ込んで呉れろといふのである。そして、どうせ、さうなれば、夫婦にならうといふ意味の含んでゐるのが分つた。

篠原はたゞさへ興ざめてゐるところへ、五十づらを提げたでぶ／＼婆アが、自分の女房の自選候補者として、白い物を緞だらけの顔に塗つて來たのを憤慨した。然し、さうまでは言葉にあらはさないで、

「お前さんがもつと若かつたら、妾にでもして樂に暮させるのに」と答へて、歸してしまつた。

さて、それを皮肉に歸して見たところが、自分の胸は何となくむしやくしやして堪らない。自分はまだあのおかみに見くびられてるほどくすぶつた、蟲が湧く様な男やもめではないと思ふ。

たま／＼下座敷へ隣りの菓子屋の若いかみさんが來て、お民といふ預り娘と話をしてゐる。お民と云ふのは、知人から頼まれて、自分の家の臺どころを引き受けさせてゐるかたはら、どこかの女學校へ通はせる約束がしてあるものだ。然し篠原自身の考へでは、かの女さへ承知すれば、直ぐにも自分の長男の專一——からだが悪いので、中學校も卒業させず、保養かた／＼田舎の家の取り締りをさせてある——に嫁がせたいのだが、渠はお民のそれを承知しないのを苦にしてゐるのである。

兎に角、若いをんな共の浮き／＼した笑ひ聲に氣を取り直し、二階の馳走の残りをおろして來させ、次男の勝次の勉強してゐたのをも呼びおろし、お民に焼酎を一合買はせにやり、隣りのかみさんや自分のうちのものにお酌をさせながら、こじれた酔ひを呼び出し始めた。

「おい、お民、今の婆アさんをよく見たか？」篠原はにこ／＼しながら勿體振つた顔を向ける。

「はい、よく見ました」と、お民は、却つて勝次や隣りのかみさんの方を向いて、意味もなく笑ふ。

篠原は勿體振つた顔を、手に持つた猪口の上に出しながら、

「あの皺ツつらで、おれの女房になりたいと云ふのだ。どうだ、勝、お前のお母さんにしてやらうか？」

「それがよう御座いませう」と、中學三年生の勝次が、小まツちやくれて冷かす。

「何ぼ何でも、ねえ、待合のおかみさんでは——」と、をんな同士があひ槌を打つ。先生が本意で云

ふのではないと、みんなに呑み込めてゐたからである。

「如何にこのお父さんは老いぼれても」と、篠原は猪口を下に置いて、「まだあんな婆アさんの色男にはならない。」

みんなは之を聴いて吹き出した。

「然し、勝」と渠は勝次の方には向かず、意味ありげにお民をじろく見て、「あの専一はいゝ男だ、なア。」

「さうですか」と勝次はあしらつた。お民はまた自分に結婚を勧めると感づいたやうに、横を向いて嫌な様子をした。

「お民は馬鹿だから困る」と云つたが、渠は氣を換へて、例の自慢の、區會や區の黨派的關係に對する權謀術數のかけ引きを語り始めたが、段々、またお民にばかり對するやうに、若い女の心得やら、女が年頃になれば早く行ふべき結婚やら、——結婚する男をよく選ぶべきことやら、——長上を敬ふべきことやら、——柔順であるべきことやら、——いろんなことを歴史や人の身の上にかこつけて、鹿爪らしく説き出した。が、誰れも興に乗つては來なかつた。

「けふは、朝から眠い日、ね」と、お民はこちらにはかまはずに云つた。

「さう——あなたは——と、隣りのかみさんは疑問的に答へた。

「それだから、農學士の奥さんにやア成れん。」篠原は斯う云つては見たが、勝次に目で本統のことは云ふなと命じた。専一は中學さへ病氣の爲め中止したが、お民には農科大學を出たと云つてあるのだ。

「……………」お民はかみさんと何だか冷笑的な默笑を取りかした。が、かみさんは近頃這入つた借家人で、うちのこと知る筈がないと、篠原は高をくゝつてゐた。

「さア、これからお父さんがいゝ喉を聴かせてやる」と、渠は勝次に本を取つて來させ、老眼鏡を通して、渠の得意な清元の「明け鳥」、浦里時次郎をうなり出した。

隣りのかみさんは自分のうちから呼ばれたので早く歸つて行つたが、「好いた男にわしやいのちでも」といふところに至る頃には、お民もいつの間にか玄關でいびきをかいてゐた。

「お民！ お民！」と呼んだが、聲がない。「勝、お民を起して來な。この大切なところを聴かなければやア、人情は分らない。」

「……………」勝次はしぶく立つてお民を起した。

篠原は徳利を傾けると、一滴もない。もう一合買つて來る様に命ずると、もう遅いから、酒屋が寢てゐる、いや、まだ寢てゐない、みたら叩き起せばいゝなどといふ押し問答のすゑ、お民は再び買ひに行つて來た。勝次はその間に、

「つまらないから、僕は御免を被ります」と云つて、多少むツとした調子で二階へあがつてしまつた。お民ひとりを對手の「好いた男に」も實は張り合ひがない。その上、かの女のねむたさうな様子を見ると、片手を突いて膝を少し横にはだけて、如何にもだらしない。とても大切な息子の女房にすることは出来ない様な氣にもなる。さうかと云つて、あの若いのに、——そのおやぢの仕込んだと云ふ漢學のおかげでか——可なりしツかりしたところがあるのを憎いとも思ふ。急に自分の血が全身に湧き立つ様な氣がして、篠原はぢツとお民の方を見た。

さう悪い器量でもない。この田舎女も萬ざら棄てた代物ではない。然し目を轉じて、ふたりの間にはさまつてゐるちやぶ臺の上を見ると、清元の本に向ふとてかけた老眼鏡がまだそのまゝ自分の鼻さきにかゝつてゐるからでもあらうが、見えるものがすべてはツきりと穢く思はれる。臺のおもても拭き方がよくない様だし、皿小鉢も何となくぢぢむさい。女房がゐれば、こんなことはないのと思ふと同時に、お民が少しは氣をきかせて呉れてもよからう。自分の身のまはりや顔ばかりに氣を取られてゐないで、もツと甲斐々々しく働いて呉れてもよからうといふ不平が起る。然しまた篠原は、それを口へ出して云つても駄目なことを知つてゐた。

「わたしは下女に來たのでは御座いませんよ」と云ふ素振りが、これまでも度々お民の舉動に見えた。それでは早く跡取りの嫁になつて呉れ、ばい、のだが、それも承知しない。女學校へ通はせてや

ると云つたのは、嫁にするつもりであつたからではないか？ たゞわけもなく、このせちがらい世の中に、學校に行く費用まで出してやる馬鹿がどこにあらう？ イツそのこと、望みを換へて、自分の妾同様にやらうか？ 然しそれも、餘り兩方の年が違ふので——

夜が更けたのか、羽織りを引ツかけてゐるのが寒くなつたので、單衣に襦袢の襟のはだけたのを直し、お民に酌をさせて、酒を二三杯つゞけざまに飲んだ。

「何を笑つてる？」

「……………」

「男が酒を飲むのがかしいのか？」

「でも——」首をかしげた様子などはそツくりまだおぼこだ。

そとはしんとして、人通りが絶えた様だ。

何だか心が落ちつかないまゝに、

「どれ、おれが手の筋を見てやらう。」篠原はそのからだを臺の横手に延ばし、變な風に尻を高くして兩脇をつき、「お前の手をお出し」と、自分の兩手をひろげた。

お民はたゞ申しわけのやうに莞爾してゐるが、なか／＼動く様子がないのを、篠原は無理にすゝめて手を出させた。

両手でお民の右の手の指さきを握つた時、老人の胸はときめいた。あつたかい血の循環じゆんくわんを感じると共に、昔、國で鶴子といふ藝者にさうして見たことがあるのを思ひ出した。昨年死んだ家内かないも鶴子をよく知つてゐたのだと。

「この筋がかう出てゐるのは出世のしるしだが、これがかうなつてゐるのは」と、指さきで強く押さへた。

「もう、よろしい——ありがたう」と、お民は早口に冷かし氣味で云つて、引ッ込めようとする手を、また一方の手でしツかり握り、

「まア、お待ち」と鹿爪しかつめらしい様子になつて他方の手の指さきで今の筋を追ひながら、「ええツと、かうなつてゐるのは、その——強情の筋——」

「さうでせうよ」と、お民は急に手を引いて、もとの通りに坐つた。

「いやか？ その——お前は——」手でなほかの女を追ふやうにしたが、燃え立つやうな感情が一つの強い言葉となつて喉のどまであがつたのをぐいと呑みおろした。そして「げえツぶ」と云ふのにまぎらせて、篠原はごろりと横になり、片手をかの女の膝近く延ばしたまゝ、他の手をまくらにして瞑目めいもくする。

急に寂しくなつて來た。こんな氣持ちになる時は、時間さへ早ければ、直ぐあの待合の婆アさんの

ところへ行つて、馬鹿口をきゝ乍ら、一杯飲み直すものを！——さりとして、あの婆アが自分の女房になりたい謎なぞをかけるなどは、よく／＼おれも爺ぢいに見られてゐるのだ。あれと同じ年齢でも、死んだ女房はまだしも活氣があつた。そして、女房の若い時などは、水々した美人であつた。素直で、利巧で、よくおれの心を呑み込んで調子を取つて呉れた。上の娘がおれに手頼たよらないで、あればかりを力にしてゐたから、あれが死んだのに落膽して、直ぐその跡を追つたのも尤もだ。おれもあんなに女房の一生を虐待せずに、もツと可愛がつてやればよかつたのに——おれがこれまでやつて來たのも、あれがゐるからだだと世間は云つてゐるさうだが、全くのことだ。

片腕をなくして、おれは急に爺ぢいむさくなつた様だ。病身な息子の爲めばかりに、おれの死後の計けいを立てると、金錢慾が露骨に出て來る。自分の心は卑しくなるばかりだ。苦勞のうちにも何等楽しみといふものがない。馬鹿々々しい世が一しほ馬鹿々々しくなる。

あゝ、もう、金錢も入らない、名譽も入らない、今一度若い時に返りたい！

と思ふとたん、鶴子の藝者姿があり／＼と現はれて來た、國の料理屋の四疊半——

「今晚は——」

鶴子はさし向ひに坐つて、ヂツと自分を見つめて、今夜の來かたの遅おそかつたのを恨んでゐる目つき——

自分は同じ武術練習生と餘所で飲んでゐたので、それを出し抜いて遅くもやつて来たのは手柄だと思つてゐたのに――

十分酔つてゐるので、今夜は何か奇抜な芝居をしようかと考へて来たとなんだから、鶴子の不興を慰めかたぐ、

「どうだ、今から駆け落ちをしようか？」

「致しましょう。」

鶴子は飛び立つほどに喜んだ。かの女は抱へ主の虐待に苦しんで、いつもそれを自分に訴へてゐたのだ。

かの女は早速二人乗りの車を用意して、自分を促す。かの女は眞面目でいそ／＼してゐる、自分は室を出にくいほど酔つてゐる。

『さア、早く』と手を引かれて室を出て、裏口から幌かけの車に乗り、横抱きに抱き合つたまゝ、ずん／＼進んで行く。

自分には結び名づけが家にあるので、鶴子とはたゞひいき仲で、實際の關係はなかつたのだが、觸れ合つてゐるからだとかからだとの間が、車の動揺により、離れてはまた合ふたんびに、女のあつたか味とやはらか味とが感じられて、如何にも棄て難い――

「末はあなたと夫婦ですよ。」

「さうだ。さうだ。」

「それでも、お貞さんが可哀さう、ね」と、鶴子は自分を抱きしめる。貞子と云ふは、乃ち、自分の結び名づけだ。――

車はずん／＼進んで行く。――

「あなた、ほんとうでせう、ね？」

「ほんとうだとも、ほんとうだとも。かうして行くのが第一の證據だ。」

「それでも、餘り急ですから、狐につまゝれてはしないかと思ふの。」

「全體こゝはどこだ？」

「もう、古河へ近いでせうよ。」

「古河へ？」

自分は喉がかわいて、水が欲しくなつたので、車をとめさせた。

「水はないか」と聴くと、

「おほ川の水よりほか御座りません」と車夫が答へる。――

車を出ると、松の並み木道で、もう、古河の船乗り場が向ふに見える。夜は明けがただ。鶴子を見

ると、お座敷着のぞべら／＼とした姿を、左袂取つて立つてゐる。赤い蹴出しが朝風に揺られてゐるのに心も動いたが、酒の酔ひは冷りと急に醒めてしまった。――

「一體どうしたのだ？」

「どうしたもあつたことですか、あなたが逃げようとおツしやつたので、やう／＼こゝまで来たんぢやア御座いませんか？」

「こりやアおれの間違ひだ。たゞ、ほんの、狂言をやらうとしたばかりだ。」

「そんな無責任なことが出来ますか？ わたしや一生懸命です！」

「一生懸命であつても、なくつても、おれが酔ひの勢ひに乗じてやつたことで、かう醒めてしまつては、歸つて貰ふほかは致し方がない。」

「あなたも武士の子ぢやアないですか？ 人を馬鹿にするもほどがあります！」――

自分は道ばたの木の株に腰をかけ、興ざめたまゝ、煙草を喫んでゐたが、

「武士の子が、かう、この通り、あたまを下げて頼むから、一應引き返して貰ひたい、跡の始末はおれの方で甘くつけるから――」

鶴子はわツと泣き倒れた。――

「あゝ、くやしい！ くやしい！」かの女は濕ッぽい地べたにつつ伏して身をもがきながら、「あゝ、

くやしい！ わたしやこんなに馬鹿にされたことはない！――もう、主人へは合はす顔がなし、行くところがない！――死んでしまふ、死んでしまふ」と云ひ出した。――

「鶴ちゃん、許して呉れ。おれが悪かつた。萬事はおれが引き受ける。」

「そんな呑氣なことぢやアない、わたしの顔がつぶれた！ えゝ、わたしの――わたしの顔がつぶれた！」

かの女のもたげたらめしさうな顔つきは忘れられない。地獄の鬼もさういふ色をしてゐるかと思はれるほど青かつた。もつとも、毎日夜ふかしをして朝寝坊をむさぼる女のことだから、いつも生地きぢの顔色は悪いのかも知れないが、涙にお白粉のはげた跡が青ざめて、松原のうすら寒い朝景色も物凄く見えた。――

くやしまぎれに、鶴子は着てゐる縮緬の着物の袖をかみ切るのを見て、

「あゝ、惜しい！」と一言、自分は吸つてゐる煙管きびるをおのづから取り落した。

何だか手持ち無沙汰なので氣がつくと、自分は昔あつたことをありのまゝに夢見てゐたのだ。

目が覚めてからも、鶴子の事を思ひつゞけた。かの女は氣の毒な女であつたツけ――あの時、無理に車に乗せて引ッ返し、自分の知り合ひの人の二階に隠し置き、自分がひとり出て行つて形勢を窺うかがふと、鶴子が逃亡したと云ふので、抱へ主は八方に手をくばつて探してゐた。最もいゝ玉がぬけ出した

のだから、血まなこになるのも無理はなかった。――

自分は平氣で抱へ主の家に行くと、主人はむツとした様子だ。わざと落ち着いて、
「どうした？」

「ど、どうしたもあつたこつてすか、鶴子はあなたとかけ落ちしたさうぢやア御座いませんか？」

「かけ落ち？ 馬鹿を云つちやアいけない。鶴子はおれがかくまつてある。」

「何が故にそんなことをなさる、うちぢやア大變な騒ぎぢや御座いませんか？」

「何も騒ぐにやア及ばない。お前の方が悪いんだ。」

「何も悪いどころか、うちの高價な玉たまがなくなつては、商賣が立ち行きません。」

「それ位大切なものなら、なぜあれを虐待する？」

主人はぐツと胸にこたへたらしい、

「虐待と申して――」

「いや、虐待してゐた。貴様の仕うちが悪ければこそ、鶴子がいつも泣いてゐるのだ。以後あれの待遇を改あらためると誓ちかへ。さうすりやア、おれがあれを返してやる。」――

主人が誓つたので、自分は鶴子を返してやり、鶴子には十分な花を與へた上に、臺なしになつた衣服をすべて買ひもどしてやつた。――

その日は前夜の夜あかしやら、心配やらでぐツすり寝たがと考へるかたはらに、ぐうぐう云ふいびきが聽えて來た。

ふと氣がつくと、お民がちやぶ臺のそばにつツ伏して寝てゐる。

篠原は起きあがつて徳利をかたむけたが、もう一滴もない。今では何よりも可愛い徳利の酒さへ一滴もない。

渠は情なくなつて、ほろりと涙がこぼれた。

鶴子はどうしたらう？ あれから暫く主人の待遇もよくなつたと云つて嬉しがつてゐたが、自分には挨拶もしなくツて、やがて東京に出た。自分も、親類のものから、あゝして置いては、若いもの身は持てないと云はれ、結び名づけの貞子といよ／＼結婚して、東京へ出た。

自分は若い女房をつれて上野の山門――自分は日光の門跡に關係ある家柄だから、威張みはつて這入れはひば這入れたのだ――に這入り、小高いところの樹かげにふたり立ち並んで、池の端の辨天堂やら、本郷の高臺などのいゝ景色をながめたことがある。女房は非常に喜んで、

「これから、こないゝ都に住むんですか、ねえ」と云つた。

いゝ都は、貞子の爲めには、實にせちがらい世であつたのだ。政治上の奔走やら、事業の失敗やらで、家内を安心させた日は殆ど一日もなかつた。

それにしても鶴子はどうしたらう?

湯島の天神そばに住んでゐる時、女房と一緒に銭湯せんたうへ行つた。今時のとは違つて、湯ぶねに鳥渡一寸幅ぐらゐの板の仕切りがあるだけで、殆ど男女混浴であつた。男の方から手が出たとか、女の方から足が出たとか、入れ込み時代には、よく争ひが起つたものだ。その湯ぶねの三尺ほど手前を上から鳥居——龍などの形をつけた——がかぶさつて来て、石榴口とらごもぐちになつてゐるから、中は晝間でも薄暗かつた。そのの流し場も、眞ん中の水ぶねとおか湯との中央を粗雑な板仕切りが通つてゐるだけで、男女は自由に行き來が出来たし、湯ぶねのそとがはの足場に腰かけて洗つてゐると、どちらからでも見通しであつた。

自分はその足場に腰かけて、貞子に背中を流させてゐると、貞子は不意ふいに流しの手をやすめて、

「あら、鶴ちゃんが」と注意した。見ると、鶴子が、女湯の流しと定められた方の片隅で、仕切りに顔をみがいてゐた。自分等がゐるのを氣が附いてゐないらしい。

「鶴ちゃんではないか」と聲をかけると、びつくりしてふり向き、

「あら、まア」と、鶴子は直ぐ立つて來たが、貞子がそばにゐると、みんなが裸體同志はだかどうしなのにまごついたのだらう、きまりが悪さうな様子をして、「まア、思ひがけないところで、ねえ」とにが笑ひしながら、湯の中へ飛び込んだ。

自分等も亦湯の中に這入つて、互ひに首だけでの挨拶やら、思ひ出やらを語り合つた。そして鶴子も別に悪い氣を持つてゐる様な素振りは見せなかつた。然しその心中では、うそのかけ落ち事件を恨んでゐたかも知れないし、また、もう、女房が出來てゐる男だから、二度と遇あふ必要がないと思つてゐたかも知れない。

湯島の天神町のかうくしたところに住んでゐるから遊びに來いと云つたら、きつとお伺ひ申しますとは答へたが、その後一度も顔を見せなかつた。自分もかの女のおほまかに名のつた住所をわざわざ尋ねて行く暇ひまもなかつた。

あれから鶴子はどうしたらう! かう考へて、渠は加減のいゝ湯に這入はいつてゐる様な氣持ちになつて、うつら／＼とまた夢を見てゐる様にかの女を思ひ浮べようとした。

女房がなくなつた今日では茶飲み友達にでもならうものを——あの時まだ藝者に出てゐたのだらうか? 今ではどこかへ片づいてゐるだらうか? それとももう死んだか知らん? かう段々考へて行くと、たゞさへ寂さびしい上に、一しほ心細くなつて、死んだ女房や行くへの分らない鶴子にわざと見棄てられた様な氣になつた。

すると、鶴子が、古河こがの松の並み木道でうらめしさうに、悔しがつて、お座敷着をかみ切つた時の優しい姿が目の前に浮んで來て、どうしても忘れられない様な、離れられない様な、何とも云へない、

あつたかい、やはらかな感じを興へる。渠は幻影の間に若返つてゐた。

然し氣がついて見ると、酒の興も醒めたし、世の中が一しほ厭になつたかの様で——自分の老いぼれたからだに、夜の氣は用捨なく迫つて來た。

風を引かせてもと心配になつたので、お民を呼び起し、もう、床を取つて休めと命じ、自分も二階へあがつて、勝次の寝てゐる次ぎの間の寢床に這入つた。が、どうも、昔が戀しくツて——

「鶴子はどうしたらうよ」湯島の錢湯で、自分の妻が鶴子を見とめて、「あら、鶴ちゃんか」と云つた時の、その若い聲色こゝろを眞似て、篠原先生は、蒲團の一端をかゝへながら、ひそかに「鶴ちゃん、鶴ちゃん」と繰り返してゐた。そして渠の寝てゐる、その眞ツ下に當る座敷にお民がだらしなく枕をはづして、ぐうぐうといびきをかいてる姿が、今夜に限り、ありぐうと見えるやうであつた。

——明治四十二年三月作——

解説

『耽溺』はいふまでもなく、岩野泡鳴の出世作である。明治四十二年二月の「新小説」に掲載され、忽ち、文壇の注目を集めた。

この小説の材料は、大體、若いころの彼の身邊の事實を書いたものであらう。たゞ、場所は、小説では國府津の海岸になつてゐるが、實際は日光である。そこへ一夏避暑にいつた商業學校の英語の先生が、隣りの料理屋の抱へ藝者吉彌といふのと馴染になつて、そのつもりでやつて來た脚本の仕事などは、ソツチのけになる。藝者といつても、色が黒いので、土地の人は「おからす藝者」と呼んでゐる不見轉同様の女だ。その妓を女優に仕立てようといふ目的で、受出しの無理算段をやるが、吉彌には、それでもいろいろと關係のついてゐる土地の客があつて、先生の思ふやうにはならない。

旅先きの亂行をきいた先生の細君は、ヒステリーを起して、國府津までおしかけてくる。結局、有耶無耶に、細君を跡始末のかたにのこして、先生は歸京する。その間にも、先生はメレジュコフスキーの『先驅者』を熱讀し、レオナルド・ダ・ヴィンチをなつかしみ、半獸主義の思索にふけらずにはゐる。

られないのだ。

「デカダンは、むしろ、不安を不安のまま、出發するのだ。」

とは、そのころの彼が作中で論じた言葉だ。

しかし、國府津にのこされた細君の身邊にも町の俠客たちからの危険が及びさうになるので、細君は子を抱へて、青くなる。——そして、急いで歸京して、

「憎いのは吉彌、馬鹿者はあなただ」といつて泣くのだが、先生はここに至つても尙、

「自分は耽溺してゐるからだ。」

「耽溺が生命だ。」

と、呻吟するのである。

136

それから暫くして、先生は上京した筈の吉彌の様子を探るつもりで、淺草の千束町の家をたづねる。そこで果して、大きな丸髻姿の吉彌を見出す。女は口のはたの爛れは直つたやうだが、その代り眼病の方はひどくなつてゐる。勤をしてゐる時は、氣の張りがあつたので、まだしも病氣をおさへてゐられたのだが、張りが抜けると同時に、急にそれが出たのであらう。やつぱり梅毒患者だつたかと思ふと、先生はさすがに身の毛が逆立つた。そしてもう女優問題については何もいひ出す氣もなくなつて「さよなら」を凱歌の如くいひすて、引き上げる——。

137

かうした一種の戀愛小説だが、所謂ラヴシーンといふやうなものではなく、もつと生々しい現實の露出である。硯友社ばりの、美男美女の美しい戀物語を讀みなれてゐたその當時の讀者達は少からず面喰つた。

しかし、この小説を正宗白鳥氏が漱石の『坊つちゃん』と比較して『坊つちゃん』が漱石全集に於て占めてゐる地位と、よく似てゐるといつてゐる通り、彼の諸作品を通じて、屈指の代表作であることはあきらかである。

「今日、小説が拵へものでなくなつた以上、僕らは箸をとると同じ心持で筆を執つてゐたい。飯を食ふのと同じ態度で作をしたい。うまい時もあらう。まづい時もあらう。然し誇張や手段のために、平常の態度を狂はせたくない。」

とは、彼が、蟹の罐詰事業を思ひ立つて樺太行の途次、小樽で船出を待ちながら認めた『耽溺』の「序文」の中で、偽はらぬ自己の心情をのべたところだ。

——當時の文壇的な評判も、概して好評で、そのころ批評壇の權威であつた讀賣新聞の日曜附録などでも、大いに賞めてゐる。花袋や秋江なども、これを認めた。

實に、泡鳴は、この小説一篇を以て、藤村、花袋、秋聲、白鳥等、自然主義文豪と比肩し、『破戒』『蒲團』『新世帯』『五月幟』などと共に、日本自然主義文學の、歴史的な作品たるを得たのである。

——美しい額縁にをさまつた美男美女の見えすいたラヴシオンはなくとも、眞實に徹した人間愛慾の、飾りも誇張もない深い底光りのする美しさは、この小説の何といつても動かし得ぬ魅力である。すべてをはぎとつて、トコトンまで、立ち割つていつた人間精神のつよい愛と慾望の輝かしいまでの粘り、——それを泡鳴は、實に、異常な程の熱情で描破してゐるのである。

尙、この小説は、甲州の鹽山といふ温泉で書かれたもので、のちの「五部作」に出てくる清水お鳥が書き上げる原稿に、片つばしからルビをふつていつたといふ話だ。

短篇『篠原先生』は、明治四十二年三月の作。同四月の「新古文林」に掲載されたものである。芝の區會議員、篠原勇が、細君と娘を、つゞけて亡くしてから、男やもめの物足りぬ生活を送つてゐる或る日の夕ぐれ、お民といふ預り娘にお酌をさせながら、清元の「明烏」などを唸つてゐる。

ふと、昔、國許で知つてゐる鶴子といふ藝者のことを想ひ起す。淺酌低唱のうちに、まどろみかけた夢は、その鶴子と、狂言のやうな駆け落ちをするところを見る。——夢からさめると、民子はチャブ臺の傍にだらしなく膝を崩して、寝てゐる——篠原はいそいで徳利を傾けたが、もう一滴もない。あまりの佗しさにホロリと涙をこぼした先生は、又、女房のお貞が生きてゐた頃、湯島天神のそばの錢湯へいつて、鶴子といふ藝者に、邂逅した時のことなど思ひ出して、その幻影を追ふのであつた。

孤獨になつた中老男子の官能の、しみじみした寂寥感が神祕的な、象徴的な手法によつて、相當に描けてゐる。

初期のものとしては、『耽溺』について、自信のある作品であつたらしく、『耽溺』の序文にも、「耽溺に至り、計らずも君の『蒲團』と等しい第二の戀を取扱ふことになり、君も僕の小説に於ける態度を認めてくれたが、『篠原先生』を君はどう見るか、僕はそれを知りたいのだ。短篇ながら、耽溺だけのことは書いてゐると思ふ。」

といつてゐる。君とは、斷るまでもなく田山花袋のことである。

74	55	7	283	280	268	277	198	96	85	29	53	28	211	296		
吉屋信子著	生田春月著	島田清次郎著	島田清次郎著	藤森成吉著	室生犀星著	室生犀星著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	宇野浩二著	久米正雄著	久米正雄著	佐藤春夫著		
海の極みまで	相ひ寄る魂	地上(地に叛くもの)	地上(地に潜むもの)	若き日の悩み	性に眼覚める頃	あにいもうと	高原の日記	静夜の曲	人間苦	無	戀愛合戦	破船	學生時代	田園の憂鬱		
六〇	近刊	四五	四五	四〇	四〇	四五	三五	三五	三五	三〇	六五	六〇	四五	二五		
287	254	108	205	43	42	109	44	26	193	302	222	191	247	218	212	86
小島政二郎著	小島政二郎著	小島政二郎著	細田民樹著	加藤武雄著	中村武羅夫著	長谷川 伸著	吉川英治著	吉川英治著	林 不忘著	牧 逸馬著	牧 逸馬著	牧 逸馬著	吉屋信子著	吉屋信子著	吉屋信子著	吉屋信子著
心の青空	花咲く樹	海	眞理の春	久遠の像	蒼白き薔薇	直八こども旅	貝殻一平	雲霧閣魔帳	大岡政談	海の無い港	この太陽	地上の星座	理想の良人	双鏡	暴風雨の薔薇	空の彼方へ
七〇	六五	四〇	四五	四五	六〇	三〇	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五

134	203		210	54	307	286	234	230	121	120	30	1	
小栗風葉著	泉 鏡花著	小杉天外著	廣津柳浪著	二葉亭四迷著	森 鷗外著	森 鷗外著	夏目漱石著	夏目漱石著	島崎藤村著	島崎藤村著	島崎藤村著	島崎藤村著	
終編 金色夜叉	婦系圖	魔風戀風	今戸心中・河内屋	平	雁	阿部一族	草枕	坊つちやん	嵐・伸び支度	ある女の生涯	春	家	
三〇	四五	近刊	三五	一五	二五	二五	二〇	二〇	四〇	三〇	四〇	上三〇 下三〇	
25	263	31	3	195	187	27	4	204	290	301		294	216
山本有三著	菊池 寛著	菊池 寛著	菊池 寛著	芥川龍之介著	芥川龍之介著	芥川龍之介著	芥川龍之介著	志賀直哉著	高濱虚子著	岩野泡鳴著	徳田秋聲著	徳田秋聲著	小栗風葉著
風	忠直卿行狀記	青春圖會	勝	黄雀風	夜來の花	傀儡師	羅生門	夜の光	俳諧師	耽溺	徴	足	戀ざめ・戀慕ながし
五五	三五	四〇	五五	二五	三〇	三〇	二〇	三五	二五	二五	近刊	三五	四〇

新潮文庫

小説

郵送料

▼十五錢以下……三錢
 ▼三十五錢以下……六錢
 ▼五十五錢以上……九錢
 ▼五十五錢以上……十二錢

(著者名の上の數字は本文庫の番號です。御註文の際には、なるべく書名と併せて番號をお示し下さい。)

19	257	219	58	304	284	61	197	299	288	124	36	112	118	89		127
生田春月著	ツルゲエネ夫著	米川正夫著	米川正夫著	昇ルゲエネ夫著	ドストエフスキイ	米川正夫著	東郷青児著	三好達治著	堀・イ・ド西著	石川下著	堀口大郎著	前田鐵之助著	小牧近江著	小牧近江著	堀口大郎著	布施延雄著
初戀	獵人日記	處女地	父と子	虐げられし人々	永遠の夫	白痴	怖るべき子供たち	アンドレ・ワルテル 手記及び詩	田園交響樂	背徳者	夜ひらく	四つの戀物語	小さな町	ビュビュ・ド・モンパルナス	燃え上る青春	カルル・メン
二五	下五〇	上三五	下三五	下五〇	上五〇	下五〇	三〇	四五	二五	二五	三〇	二五	三〇	二〇	近刊	二五
152	226	137	129	293	38	306	196	138	182	270	176	136	128		116	251
日高只一著	宮原見一郎著	ハム上於荒吉著	三井光彌著	生田長江著	森田草平著	高橋健二著	森田草平著	森田草平著	森田草平著	森田草平著	森田草平著	森田草平著	森田草平著	森田草平著	森田草平著	森田草平著
アイヴンホト	飢	森の處女	痴人の告白	死の勝利	デカメロン	ドクトル	若きエルテルの悲み	ヘルマンミドロテア	神々の死	決闘	最後の線	ランデの死	サアニン	發作	幼年・少年	復活
下四五	上四五	三五	下三五	上三五	下三五	上三五	二五	三〇	一五	六〇	上六〇	下四五	上四五	下四五	上四五	下四五

133	199	123	46	244	224	213	175	169	5		243	8	6	275	261	52
大下宇陀兒著	甲賀三郎著	甲賀三郎著	甲賀三郎著	江戸川亂歩著	江戸川亂歩著	江戸川亂歩著	江戸川亂歩著	江戸川亂歩著	江戸川亂歩著	探偵小説	徳永直著	小林多喜二著	下村千秋著	片岡鐵兵著	片岡鐵兵著	三宅やす子著
魔人	姿なき怪盜	幽霊犯人	犯罪發明者	孤島の鬼	蠢く觸手	黒蜥蜴	吸血鬼	黄金假面	バナラマ島奇談	探偵小説	太陽のない街	蟹工船・不在地主	天國の記録	朱と緑	花嫁學校	偽れる未亡人
四五	六〇	四〇	三〇	四〇	六〇	三〇	四五	四〇	二〇		四〇	三〇	二五	五〇	三五	四〇
119	111		297	18	16	65	64	66		23	103	39		267	259	206
武林無想庵著	平野威馬雄著	廣津和郎著	廣津和郎著	廣津和郎著	廣津和郎著	高橋邦太郎著	中村暲湖著	水野亮著	第一、二、三卷	山内大宅著	日暮月著	生田長江著	ルツオ著	森下雨村著	延原謙著	大下宇陀兒著
サフオ	モオバツサン選集	脂肪の塊	娼婦の娘	女の一生	ナナ	椿姫	ホブリイ夫人	從妹ベツト	第一、二、三卷	モンテ・クリスト伯	海の嘆き	懺悔録	翻譯小説	甲蟲殺人事件	シャイロック・ホームズ	奇蹟の扉
三五	四五	近刊	二五	四〇	四〇	四五	八〇	下四五	各四五	二五	二五	上五〇	下八〇	六〇	四〇	五五

7
1

148	147	146	145	144	143	142	141	140	139		225	135	115	95	33	185
現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	室生犀星著	生田春月著	生田春月著	生田春月著	生田春月著	生田春月著	野口雨情著
三木露風集	北原白秋集	横瀬夜雨集	野口米次郎集	岩野泡鳴集	蒲原有明集	薄田泣菫集	土井晚翠集	島崎藤村集	初期詩人集	室生犀星詩集	夢心地・春の序曲	澄める青空・自然の恵み	感傷の春	春月小曲集	靈魂の秋	草の花
二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	近刊	二〇	二五	四〇	一五	三五	二〇
113	100		87	300	104	209	84	125		35	48	171	170	155	149	
横谷正雄著	トクゲエネフ著	ミル天来著	生田長江著	山内義雄著	白鳥省吾著	日夏耿之介著	幡谷正雄著	幡谷正雄著	新城和一著	生田春月著	生田春月著	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集	現代詩人全集
イブンチェリン	散文詩	失樂園	神曲	佛蘭西詩選	ホイットマン詩集	ワイルド詩集	バイロン詩集	ワアズワス詩集	ユーゴー詩集	ハイネ詩集	ゲエテ詩集	千家元麿集	萩原朔太郎集	堀口大學集	生田春月集	川路柳虹集
一五	二〇	近刊	下四〇 上四〇	四〇	三〇	三五	二〇	四〇	近刊	三〇	二五	二五	二五	二五	二五	二五

77	59	37	260	107	80	217		177	90	117	132	49	232	240	22
横山有策著	シエイクスピヤ著	横山有策著	長谷川伸著	山本有三著	山本有三著	菊池寛著	武者小路實篤著	牧逸馬著	高垣松雄著	谷崎潤一郎著	アラン・ポウ著	宮島新三著	ハアテイ著	十一谷義三著	エリオット著
ジュリーヤス・シーザ	ローミオとジュリエット	ハムレット	眼の母	同志の人々	藤十郎の戀	愛慾	愛慾	バッド・ガール	ジェニイ・ゲルハート	アッシュヤア家の没落	寶島	テス	二都物語	ジエイン・エア	サイラス・マアナー
二〇	二五	四〇	三五	二五	三〇	二〇	近刊	下三五 上三五	下三〇 上三五	二五	四〇	下四〇 上五〇	下四五 上四五	下五五 上五五	四五
157	40	72	71	41	279	227	221	78	298		272	250	282	215	292
野口米次郎著	北原白秋著	白鳥省吾編	白鳥省吾・福田正夫・川路柳虹編	詩歌壇六家著	北村喜久郎著	成瀬無極著	ハウプトマン著	原久一著	中村白葉著	楠山正雄著	イブセン著	シエル著	ゲエテ著	内藤濯著	横山有策著
沈黙の血汐・山上に立つ	白秋詩歌選	昭和詩選	大正詩選	明治詩歌選	お蝶夫人	戀愛三昧・アナト	寂しき人々・織匠	どん底	櫻の園・かもめ	人形の家の盗	群盗	ウイルヘルム・テル	フアウスト	モリエール傑作集	マクベス
三〇	二〇	一五	三五	二〇	三五	三五	四〇	二〇	三五	近刊	四〇	二五	七〇	四〇	三〇

9	57	295		246	256	237	245		21	20	238	253	98	13	289	
吉田絃二郎著	北原白秋著	芥川龍之介著	鳥崎藤村著	三浦逸雄譯	早坂二郎著	生田春月著	西村二郎著	ベイトン著	生田長江著	トルストイ著	相馬御風著	トルストイ著	田中純著	トルストイ著	阿部次郎著	
小鳥の來る日	雀の生活	百艸	藤村感想集	スターリン政權を發く	戀愛讀本	ツアラトウストラ	メン遺傳法則論	我が宗教	性慾論	人生論	富國論	理想國	種の起原	解説テクノクラシイ	ニイチエのツアラトウストラの解釋並びに批評	
四〇	三五	三〇	近刊	四〇	二五	六五	二五	二五	近刊	一五	三〇	二五	二五	二〇	二五	
262	291	249	236	184	106	97	82	281	242	189	151	150	122	114	105	73
新ルツソオ著	萩原井泉水著	萩原井泉水著	萩原井泉水著	生田春月著	生田春月著	生田春月著	生田春月著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著	吉田絃二郎著
孤獨な散歩者の夢想	芭蕉風景	奥の細道を尋ねて	芭蕉を尋ねて	旅ゆく一人	生命の道	影は夢みる	眞實に生きる悩み	心より心へ	生命の微光	生の悲劇	春の日記	静かなる土	わが詩わが旅	木に凭りて	草光る	昇曙夢著
三〇	四五	四五	五〇	三〇	五五	三五	三五	四五	四五	三〇	三五	三五	三五	四〇	三五	六五

12	167	264	68	163	70	66	166	162	161	10	11		214	190	186	179
木村毅著	高須芳次郎著	高須芳次郎著	高須芳次郎著	高須芳次郎著	中澤臨川著	野上・吳・森著	野上・吳・森著	昇曙夢著	山岸光宣著	吉江喬松著	千葉龜雄著	研究・評論	萩原井泉水著	窪田空穂著	若山牧水著	金子薫園著
小説研究十二講	日本近世文學十二講	日本近世文學十二講	日本思想十六講	東洋思想十六講	近代思想十六講	近代文藝十二講	近代文藝十二講	露西亞文學概観	獨逸文學概観	佛蘭西文學概観	現代世界文學概観		井泉水句集	新選窪田空穂集	新選若山牧水集	新選金子薫園集
五〇	六五	七〇	七〇	七〇	八〇	六五	三〇	二〇	四〇	四〇	一五		四〇	三五	三五	三五
278	271	239	201	202	303	164	178	174	173		274	183	265	228	168	207
生田春月著	生田春月著	高濱虚子著	萩原井泉水著	窪田空穂著	萩原井泉水著	河東碧梧著	太田水穂著	片岡良一著	加藤三郎著	齋藤(清)著	山岸久基著	武田潤吉著	山川智應譯註	澤本治吉著	土岐善麿著	昇曙夢著
詩魂禮讚	山家文學論集	俳句は斯く味ふ	俳句に入る道	短歌に入る道	一茶研究	芭蕉研究・蕪村研究	芭蕉研究・蕪村研究	西鶴研究	近松研究	山家集・金槐集研究	源氏物語研究	古事記・日本書紀研究	和譯法華經	萬葉集	明治大正藝術史	トルストイ十二講
三五	五〇	二〇	三〇	二〇	三五	二五	二五	二〇	二〇	二〇	近刊	三〇	七〇	下六〇	四五	六五

73
19



取

25

730
194

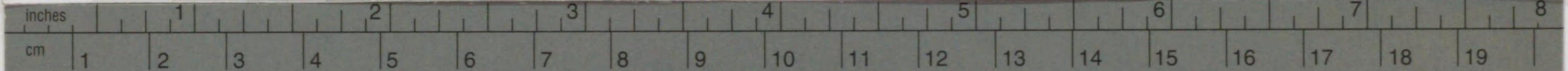


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

